



Title	Den mand der kalder sig Alvard vs. Manden der ville være skyldig : デンマーク語の小説の題名と制限的關係節の先行詞の限定方法について
Author(s)	新谷, 俊裕
Citation	IDUN. 1998, 13, p. 55-88
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/95706">https://doi.org/10.18910/95706</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

*Den mand der kalder sig Alvard vs. Manden der ville være skyldig*  
— デンマーク語の小説の題名と制限的關係節の先行詞の限定方法について —

新谷俊裕

1. 序

本誌12号(1996年)の拙稿「デンマーク語における名詞の既知形を先行詞とする制限的關係節について」の中で、制限的關係節の先行詞が“定”であり、かつ形容詞によって修飾されない場合(以下ではこれを〔定の先行詞(-形容詞類)+制限的關係節〕で表す)には、先行詞はふつう指示代名詞+名詞になり、〔指示代名詞+名詞+制限的關係節〕の構造をとるが、周辺の現象として、先行詞が名詞の既知形になり、〔名詞既知形+制限的關係節〕の構造をとることもある、ということに言及した。また、いくつかの外国人向けのデンマーク語の文法書には、〔定の先行詞(-形容詞類)+制限的關係節〕に〔指示代名詞+名詞+制限的關係節〕と〔名詞既知形+制限的關係節〕という2種類の構造が存在することに言及することをまったくしないまま、この2種類の構造の例文を用いているものがあったり、なかには、〔名詞既知形+制限的關係節〕の例文しか用いていないものがあるということに、上述の拙稿で批判的に触れ、我々外国人は用法として主流である〔指示代名詞+名詞+制限的關係節〕の方を用いるべきであると述べた。

その後、Thorborg (1996 (1992): 65) が文法の練習帳の制限的關係節の説明の部分で、制限的關係節の先行詞は指示代名詞+名詞であり、名詞の既知形ではない、つまり、*De bøger, der ligger der, skal afleveres i dag.* では先行詞は *Bøgerne* にはならず、あくまでも *De bøger* であると強調しているのを目にし、上記の主張を裏付けるものとして大いに心強く思ったものである。

しかし、Pedersen (1988: 52-53) や Galberg Jacobsen (1994: 17) が言及しているように、〔名詞既知形+制限的關係節〕の使用頻度が今日高まってきていることは、昨年(1997年)の4月下旬から10ヵ月あまりデンマークに滞在して大いに感じたところである。<sup>1)</sup> このデンマーク滞在で得た印象では、デンマークでは〔名詞既知形+制限的關係節〕と〔指示代名詞+名詞+制限的關係節〕という2つの構造について新たな研究はなされておらず、デンマーク語の研究や教育に携わる人びとは、これらの構造は両方とも正しいものとして認めているようである。それならば、この2つの構造に意味の違いはあるのか、意味の違いはないのか、違いがないとすると、〔指示代名詞+名詞+制限的關係節〕と〔名詞既知形+制限的關係節〕との分布はなぜ不均衡なのか、という疑問には明確な答えが

返ってくることはない。ただ、1つよく耳にした説明では、〔名詞既知形+制限的關係節〕は話し言葉的であるという。<sup>2)</sup> いずれにせよ、教室におけるデンマーク語の授業で、「いかなる場合でも〔指示代名詞+名詞+制限的關係節〕を用いる」ようにと指導することはできないように思われてきた。

今から50年前の Aage Hansen の研究 (Hansen 1927: 119) によると、「今」(50年前)でも、そしてユラン法 (1241年)<sup>3)</sup> のような古いデンマーク語でも、〔定の先行詞(-形容詞類)+制限的關係節〕の主流は〔指示代名詞+名詞+制限的關係節〕であるものの、〔名詞既知形+制限的關係節〕も見られる。この場合も、〔名詞既知形+制限的關係節〕が“話し言葉的”であるということとその使用の説明ができるかどうかはわからない。ただ、この Hansen の記述から、〔名詞既知形+制限的關係節〕の構造は今から700年以上も前から存在していたということがわかる。

本誌12号(1996年)の拙稿では、また、〔名詞既知形+制限的關係節〕の使用頻度が現在増加しつつあることの背景の1つとして Pedersen (1988: 52-53) が英語の影響を挙げているのを、Galberg Jacobsen (1994: 17) が否定的に見ていることを紹介した。— ちなみに、「英語の影響」の意味するところは、英語の〔定冠詞+名詞〕はデンマーク語では大体において〔名詞既知形〕に相当することから、例えば {the car → bilen} という図式ができており、類推作用の結果、この図式が制限的關係節の前の the car (that ...) にも適用され、本来は den bil (som ...) となるべきところに、bilen (som ...) という構造が生じるということであろう。— しかしその後 Pedersen (1988) を入手してみると、Pedersen は英語の影響だけを取り上げているのではなく、外国語からデンマーク語に翻訳する際の外国語、特に英語とフランス語の影響を指摘していることがわかるし、彼の説にも一理あり、完全には否定できないように思える。それは、Pedersen (1988: 53) の示す次の例から言えることである。

alle punkterne i dette program, som ...

< tous les points que ...

先行詞が制限的關係節から離れていて直前にない場合には、先行詞は〔指示代名詞+名詞〕になるという Hansen (1927: 119) の指摘<sup>4)</sup> からすると、上の例では本来 alle de punkter i ... となるはずのものが alle punkterne i ... となっているのは、翻訳の元の言語であるフランス語の影響である可能性が大いにありうるであろう。〔名詞既知形+制限的關係節〕の構造が元々デンマーク語に存在していたことは、すでに見たように、Hansen (1927: 119) の指摘するところである。また、この構造が、翻訳とは関係のないデンマーク語の本来の原文に現れることは Pedersen (1988: 52-53) や Galberg Jacobsen (1994: 17) も指

摘している。したがって、Pedersen 自身も言っているとおり、翻訳の元の外国語の影響がどの程度のものなのかということとはわからない。しかし、何らかの影響があることは否定できないと思われる。

〔指示代名詞＋名詞＋制限的關係節〕と〔名詞既知形＋制限的關係節〕との意味の違いに関して明確な答えが得られないと上で述べたが、Hansen (1927: 119) は、この2つの構造の間には、単に強調力の程度の差しかない（‘kun en gradsforskel m. h. t. fremhævnings styrke’）としており、根本的には意味の違いはないと見ているようである。「強調力の程度の差」があるということは意味の違いに結び付くと筆者には思えるのであるが、この「強調力の程度の差」と、あるかもしれない「意味の違い」に関しては今後の研究課題としよう。

この2つの構造に意味の違いがないと仮定すると、理解できないことがある。本誌12号の拙稿で触れたように、筆者の同僚の客員教授 Martin Paludan-Müller 氏が指摘するところでは、小説、フィクションの題名では〔名詞既知形＋制限的關係節〕が用いられ、〔指示代名詞＋名詞＋制限的關係節〕はふつう用いられない。ある特定の環境で、この2つの構造のうち、片一方しか用いられないということは、単にスタイル（文体）の問題であるとすることはできないのではないか、この2つの構造の間になんらかの意味の違いがあるということの現れではないであろうか。この点は未解決である。

ところで、Paludan-Müller 氏のこの指摘は論文や書物に依拠するものではなく、氏のデンマーク文学に対する造詣の深さと、市立図書館で返却された図書を書架に戻すという、氏の少年期の職歴によるものであるらしい。氏のこの感触は大いに信頼できるであろうと思われるものの、できるだけ多数の題名を調べ、氏のこの指摘の確認をしてみたいと思う。また、その過程で何か浮かび上がって来るかもしれない。

本稿は、上記の確認のため、また今後の研究の材料として、小説を始めとする書物の題名に現れる〔定の先行詞（－形容詞類）＋制限的關係節〕の例を収集し、その成果を提示することを目的とする。

## 2. 収集の対象とする書物の題名

外国語からデンマーク語に翻訳した本の題名と、その翻訳の元の題名に次のようなものがある。<sup>5)</sup>

- 1) Bjørnen, der ikke kunne lide honning.<sup>6)</sup>  
    < 1a) The Bear Who Didn't Like Honey.<sup>7)</sup>
- 2) Drengen der sejlede med Columbus.  
    < 2a) The Boy who sailed with Columbus.

3) Grævlingen som ville være bilmekaniker.

< 3a) Grævlingen som ville bli bilmekaniker.

4) Drengen der sparkede.

< 4a) Pojken som bara ville sparka.

この4点を見ると、名詞既知形という先行詞の形は翻訳の元の言語である英語、あるいはスウェーデン語の影響であると言えるかもしれない。

次の例<sup>8)</sup>ではどうか。

5) Drengen som svømmede i luften.

< 5a) The Skyswimmer.

6) Prinsessen der ikke ville giftes.

< 6a) Princess Smartypants.

ここでは、翻訳の元の言語である英語の題は関係節を含んでおらず、先行詞の形には何ら影響力を持ちえないにもかかわらず、デンマーク語の題名は〔名詞既知形+制限的關係節〕である。

次の2点は元がデンマーク語であり、それを英語に翻訳したものである。<sup>9)</sup>

7a) The Poem That Wished a Flower.

< 7) Digtet som ville en Blomst.

8a) The Maid Who Trod on The Loaf.

< 8) Pigen, der trådte på Brødet.

この2点においては、先行詞の形は英語とは全く無縁のものであり、デンマーク語に独自のものであることは明白である。

(5)～(8)で見たこれらのことから、(1)～(4)に翻訳の元の言語の影響がどの程度あるのかということがわからなくなる。つまり、翻訳の場合は翻訳の元の言語の影響があるかもしれないとはいうものの、〔名詞既知形+制限的關係節〕の構造をもつ題名は元々デンマーク語に存在しているものであるもので、翻訳ものでもデンマーク語の特性がそのまま表れているかもしれないからである。したがって、〔定の先行詞(=形容詞類)+制限的關係節〕の構造をもつ書物の題名を探すのに、翻訳ものを排除する意味はない。

以上のことから、翻訳ものを含めたデンマーク語の題名すべてを対象にすることにした。しかし、現実にはすべての題名を調べることは不可能なので、なるべく多数の題名を対象にできる方法を考えた。まず第一に行なったのは、書架にある書物を直接手に取って調べる方法と印刷されたカタログなどで調べる方法である。この方法で調べられる題名はその点数が非常に限られたものであるもので、次に考えたのはインターネットを使ってデンマークの図書館などにアクセスすることである。

### 3. 書架あるいはカタログなどから調べる方法

#### 3.1. 書架にある図書

筆者の日頃の経験から、子供向けの絵本の題名に〔定の先行詞(-形容詞類)+制限的關係節〕がよく見られると思われたし、また、『…したネコ』、『…する女の子』、『…したくないお姫さま』などと日本語で考えても、絵本にはこの種の題名が多そうなので、まずは図書館の絵本コーナーで調べた。次に本学のデンマーク語研究室の書架で調べた。

##### 3.1.1. ヘルシングエーア (Helsingør) 中央図書館の絵本コーナー

同絵本コーナーには2500~3000冊の絵本があった<sup>10)</sup>が、一部が重複していることを考慮すると、全部で1000~1500冊の異なった絵本があったとすることができようか。その中から下のリストにある19点が見つかった。<sup>11)</sup>

- 1) Bjørnen, der ikke kunne lide honning. (Barbara Maitland. 1996. Sesam) [< engelsk. The Bear Who Didn't Like Honey.]
- 2) Drengen, der ikke ville sove. (Helen Cooper. 1996. Holte. Forlaget Flachs) [< engelsk. The Baby who wouldn't go to bed.]
- 3) Drengen der sejlede med Columbus. (Michael Foreman. 1992. Forlaget Forum A-S) [< engelsk. The Boy who sailed with Columbus.]
- 4) Drengen der sparkede. (Lasse Anrell. 1997. Forlaget Thorup) [< svensk. Pojken som bara ville sparka.]
- 5) Drengen som svømmede i luften. (Brian Pilkington. 1992. Gesten. OP-forlag Aps) [< engelsk. The Skyswimmer.]
- 6) Gryden, der løb. (Knud Erik Larsen. 1987. Gyldendal)
- 7) Grævlingen som ville være bilmekaniker. (Sven-Olof Lorentzen. 1986. Sesam) [< svensk. Grävlingen som ville bli bilmekaniker.]
- 8) Gør-det-selv huset som Hans har bygget. (John Yeoman. 1994. Gyldendal) [< engelsk]
- 9) Hunden som skulle være bjørn. (Irma Lauridsen. 1994. Carlsen)
- 10) Katten, der kradsede sig. (Jonathan Long. 1994. Forlaget Apostrof) [< engelsk. THE CAT THAT SCRATCHED.]
- 11) Lammeskyen der blev væk. (Mai Brostrøm, 1994. NB PrePress)
- 12) Muldvarpen, der ville vide, hvem der havde lavet lort på dens hoved. (Werner Holzwarth. 1991. Høst & Søn) [< tysk. Vom kleinen Maulwurf, der wissen wollte, wer ihm auf den Kopf gemacht hat.]
- 13) Pigen der var klogere end kejseren og andre folkeeventyr om kloge kvinder. (Samlet og fortalt i kvindeåret 1975 af Anine Rud. Gyldendal)
- 14) Prinsessen der ikke ville giftes. (Babette Cole. 1986. Høst og Søn) [< engelsk. Princess Smartypants.]
- 15) Prinsessen, der ville være Hendes Majestæt. (Hiawyn Oram. 1994. Forlaget Forum A-S) [< engelsk. The Second Princess.]
- 16) Prinsessen som skrev på rosens blad. (Hjalmar Bergman. 1987. Carlsen/if) [< svensk. Prinsessan som skrev på rosens blad.]
- 17) Spøgelset som ville være prinsesse. (Siri Melchior. 1997)
- 18) Uret, der talte. (Claus Præstholm. 1990. Gyldendal)
- 19) Ørnen, der var bange for store højder. (Lars Klinting. Gyldendal)

### 3.1.2. 本学デンマーク語研究室の書架

デンマーク語研究室（共同研究室を含む）の書架にある著作（415点）から以下の8点が見つかった。

- 1) Barnet der blev ældre og ældre. [essays] (Benny Andersen. 1973)
- 2) Hunden der elskede agurker. (Peter Seeberg) ([fra novellesamling] Thomas Bredsdorff (red.). Novelletter. 1987. Rosinante)
- 3) Manden der holdt op med at ryge. (Tage Danielsson. 1975. Kbh. Lindhardt og Ringhof) [< svensk. Mannen som slutade röka.]
- 4) Manden der ville være skyldig. (Henrik Stangerup. 1973. Gyldendals Paperbacks)
- 5) Manden som drog ud i verden for at finde ensomheden. [fortælling] (Vagn Lundbye. 1986. Borgens Forlag. Altvidende fortællinger.)
- 6) Manden, som ville ingen ondt ... (Martha Christensen. 1989. Forlaget Per Kofod)
- 7) "Oprøret der blev væk: The Beat Generation." (fra: Else Gress. Det Professionelle Menneske. Essays og Artikler 1941-66. 1966. Gyldendal)
- 8) Stedet som ikke er. [essay] (Ole Sarvig. 1966)

### 3.2. カタログ等

次に手元にあった図書カタログ、文学史の索引等を調べた。また、デンマークの単行本には大抵の場合、巻頭に当該作家の他の作品を紹介するページがある。また、巻末には同書籍と同じシリーズに入っている他の書籍を宣伝するページがあることがある。これらも情報源とした。

#### 3.2.1. カタログ Regnbuen

Regnbuen - billed- og oplæringsbøger for de 4 til 9-årige (1997) の総計263冊から、下の10点が見つかった。

- 1) Bjørnen, der ikke kunne lide honning. (Barbara Maitland)
- 2) Drengen, der ikke ville sove. (Helen Cooper)
- 3) Hunden, som smilede. (Ulf Stark)
- 4) Lammeskyen der blev væk. (Mai Brostrøm)
- 5) Manden der elskede ost. (Garrison Keillor)
- 6) Muldvarpen, der ville vide, hvem der havde lavet lort på dens hoved. (Werner Holzwarth)
- 7) Museprinsessen eller drengen som ville opleve noget fantastisk. (Gunilla Borén)
- 8) Pigen som narrede døden. (Rose Lagercrantz)
- 9) Prinsessen der altid havde ret. (Kim Fupz Aakeson)
- 10) Ridderen der ikke ville slås. (Barbara Shook Hazen)

#### 3.2.2. カタログ NYE BØGER 1997

以下の8点が見つかった。

- 1) Byen der brændte. (Bob & Kyriaki Ramsing. 1997. Holkenfeldt 3)
- 2) Drengen som elsker at klatre i træer. (Susie Haxthausen. 1997. Borgen)
- 3) Englen, der fløj baglæns til jul. (Liz Joy. 1997. Unitas Forlag)
- 4) Katastrofen, der udeblev. (Flemming Rose. 1997. Gyldendal) [En øjenvidskildring af de seneste fem års russiske historie ...]
- 5) Kvinden som blev til en gris. (Marie Darrieussecq. 1997. Tiderne Skifter)
- 6) Manden der målte længdegraden. (Dava Sobel. 1997. Borgen) [biografier, erindringer]
- 7) Stedet som ikke er - Fremtidens nærvær, netværk og Internet. (Tor Nørretranders. 1997. Aschehoug) [Essays, kulturdebat]
- 8) Tiden der revnede. (Lotte Linck. 1997. Samleren)

### 3.2.3. カタログ Smagsprøver

いくつかの書籍の一部を少しずつ紹介する，書籍カタログ Smagsprøver から以下の2点が見つかった。

- 1) Katten der kom ind i varmen. (Cleveland Amory. 1988. Borgen)
- 2) Manden som var Lørdag. (Derek Lambert. 1988. Cicero)

### 3.2.4. 文学史 Dansk litteraturhistorie, bd. 6

Brostrøm & Kistrup (1997) による Dansk litteraturhistorie, bd. 6 の“Titelregister” (pp. 497-513) から以下の4点が見つかった。

- 1) \*Den mand der kalder sig Alvard. (Hans-Jørgen Nielsen. 1970)
- 2) Dværgen, der blev væk. (Jess Ørnsbo. 1968)
- 3) Kvinden, som gik bort over vandet. (Cecil Bødker, 1971)
- 4) Melodien, der blev væk. (Kjeld Abell. 1935)

[\* は〔指示代名詞+名詞+制限的関係節〕の構造をもつ題名であることを意味する.]

### 3.2.5. 文学史 Dansk litteraturhistorie, bd. 9

Dansk litteraturhistorie, bd. 9. Noter og registre (1985) の“Person- og titelregister” (pp. 159-240) から以下の6点が見つかった。

- 1) \*Den mand der kalder sig Alvard. (Hans-Jørgen Nielsen. 1970)
- 2) Dværgen der blev væk. (Jess Ørnsbo. 1968)
- 3) Lyset, der sluktes. (Rudyard Kipling. 1900) [< engelsk. The Light that Failed. 1891]
- 4) Manden der ville være skyldig. (Henrik Stangerup. 1973)
- 5) Melodien, der blev væk. (Kjeld Abell. 1935)
- 6) Potten, der rendte. [eventyr]

[\* は〔指示代名詞+名詞+制限的関係節〕の構造をもつ題名であることを意味する.]

### 3.2.6. A Bibliography of Danish Literature in English Translation 1950 - 1980

Schroeder (1982) の A Bibliography of Danish Literature in English Translation 1950 - 1980 に挙がっている3,000あまりの題名から，下の2点が見つかった。

- 1) Digtet som ville en Blomst. (Henrik Nordbrandt. Poem from the collection Digte. 1966) [> engelsk. The Poem That Wished a Flower.]<sup>1 2)</sup>
- 2) Pigen, der trådte på Brødet. [Folk Songs][> engelsk. The Maid Who Trod on The Loaf.]

### 3.2.7. 書籍の巻頭にある当該作家の作品の紹介，および書籍の巻末にある同じシリーズに入っている他の書籍の宣伝など

以下の17点が見つかった。

- 1) Barnet der blev ældre og ældre. (Benny Andersen. 1973) [Essays]
- 2) Brandbilen som forsvandt. (Maj Sjöwall og Per Wahlöö)
- 3) Elven, der hævnede. (Vic Suneson) [Kriminalroman]
- 4) Hunden der elskede agurker. (Peter Seeberg) (fra: Thomas Bredsdorff (red.). Noveller. 1987. Rosinante)/(fra: [novellesamling] Peter Seeberg. Rejsen til Ribe. 1990)

- 5) Huset vi bor i. (Johannes Møllehave)
- 6) Katten der fik feber. (Johannes Wulff)
- 7) Kvinden der lignede Greta Garbo. (Maj Sjöwall og Tomas Ross)
- 8) Manden der døde. (D. H. Lawrence)
- 9) Manden der fulgte med. (Erik Pouplier) [Kriminalroman]
- 10) Manden der var tilfreds med sit liv. (Christer Kihlman)
- 11) Manden der ville være skyldig. (Henrik Stangerup)
- 12) Manden som gik op i røg. (Maj Sjöwall og Per Wahlöö)
- 13) Pigen der havde alt. (Nils J. A. Schou. 1970)
- 14) Spionen der kom ind fra kulden. (John le Carré)
- 15) Stangspringeren der kom ind i varmen. (Angelo Hjort. 1984. Vindrose) [Agentroman]
- 16) Stedet, som ikke er. (Ole Sarvig)
- 17) Tiden der fulgte. (Erich Maria Remarque)

### 3.3. 書架あるいはカタログなどから得た結果のまとめ

§ 3.2 で得た結果を、複数回出て重複しているものを整理して、〔指示代名詞＋名詞＋制限的關係節〕と〔名詞既知形＋制限的關係節〕を構造別にリストにする。

#### 3.3.1. 〔指示代名詞＋名詞＋制限的關係節〕の構造をもつ題名のリスト

- 1) Den mand der kalder sig Alvard. (Hans-Jørgen Nielsen. 1970)

#### 3.3.2. 〔名詞既知形＋制限的關係節〕の構造をもつ題名のリスト

- 1) Barnet der blev ældre og ældre. (Benny Andersen. 1973)
- 2) Bjørnen, der ikke kunne lide honning. (Barbara Maitland. 1996. Sesam)
- 3) Brandbilen som forsvandt. (Maj Sjöwall og Per Wahlöö)
- 4) Byen der brændte. (Bob & Kyriaki Ramsing. 1997. Holkenfeldt 3)
- 5) Digtet som ville en Blomst. (Henrik Nordbrandt) [fra: Digte. 1966.]
- 6) Drengen, der ikke ville sove. (Helen Cooper. 1996. Holte. Forlaget Flachs)
- 7) Drengen der sejlede med Columbus. (Michael Foreman. 1992. Forlaget Forum A-S)
- 8) Drengen der sparkede. (Lasse Anrell. 1997. Forlaget Thorup)
- 9) Drengen som elsker at klatre i træer. (Susie Haxthausen. 1997. Borgen)
- 10) Drengen som svømmede i luften. (Brian Pilkington. 1992. Gesten. OP-forlag Aps)
- 11) Dværgen, der blev væk. (Jess Ørnsbo. 1968)
- 12) Elven, der hævnede. (Vic Suneson)
- 13) Englen, der fløj baglæns til jul. (Liz Joy. 1997. Unitas Forlag)
- 14) Gryden, der løb. (Knud Erik Larsen. 1987. Gyldendal)
- 15) Grævlingen som ville være bilmekaniker. (Sven-Olof Lorentzen. 1986. Sesam)
- 16) Gør-det-selv huset som Hans har bygget. (John Yeoman. 1994. Gyldendal)
- 17) Hunden der elskede agurker. (Peter Seeberg. 1987/1990)
- 18) Hunden som skulle være bjørn. (Irma Lauridsen. 1994. Carlsen)
- 19) Hunden, som smilede. (Ulf Stark)
- 20) Huset vi bor i. (Johannes Møllehave)
- 21) Katastrofen, der udeblev. (Flemming Rose. 1997. Gyldendal)
- 22) Katten der fik feber. (Johannes Wulff)
- 23) Katten der kom ind i varmen. (Cleveland Amory. 1988. Borgen)
- 24) Katten, der kradsede sig. (Jonathan Long. 1994. Forlaget Apostrof)
- 25) Kvinden der lignede Greta Garbo. (Maj Sjöwall og Tomas Ross)
- 26) Kvinden som blev til en gris. (Marie Darrieussecq. 1997. Tiderne Skifter)
- 27) Kvinden, som gik bort over vandet. (Cecil Bødker. 1971)
- 28) Lammeskyen der blev væk. (Mai Brostrøm. 1994. NB PrePress)
- 29) Lyset, der sluktes. (Rudyard Kipling. 1900)

- 30) Manden der døde. (D. H. Lawrence)
- 31) Manden der elskede ost. (Garrison Keillor)
- 32) Manden der fulgte med. (Erik Pouplier)
- 33) Manden der holdt op med at ryge. (Tage Danielsson. 1975. Lindhardt og Ringhof)
- 34) Manden der målte længdegraden. (Dava Sobel. 1997. Borgen)
- 35) Manden der var tilfreds med sit liv. (Christer Kihlman)
- 36) Manden der ville være skyldig. (Henrik Stangerup. 1973. Gyldendals Paperbacks)
- 37) Manden som drog ud i verden for at finde ensomheden. (Vagn Lundbye. 1986. Borgen)
- 38) Manden som gik op i røg. (Maj Sjöwall og Per Wahlöö)
- 39) Manden som var Lørdag. (Derek Lambert. 1988. Cicero)
- 40) Manden, som ville ingen ondt ... (Martha Christensen. 1989. Forlaget Per Kofod)
- 41) Melodien, der blev væk. (Kjeld Abell. 1935)
- 42) Muldvarpen, der ville vide, hvem der havde lavet lort på dens hoved. (Werner Holzwarth. 1991. Høst & Søn)
- 43) Museprinsessen eller drengen som ville opleve noget fantastisk. (Gunilla Borén)
- 44) "Oprøret der blev væk: The Beat Generation." [fra: Else Gress. Det Professionelle Menneske. Essays og Artikler 1941-66. 1966. Gyldendal]
- 45) Pigen der havde alt. (Nils J. A. Schou. 1970)
- 46) Pigen, der trådte på Brødet. [Folk Songs]
- 47) Pigen der var klogere end kejseren og andre folkeeventyr om kloge kvinder. (Samlet og fortalt i kvindeåret 1975 af Anine Rud. Gyldendal)
- 48) Pigen som narrede døden. (Rose Lagercrantz)
- 49) Pigen, som trådte på brødet. (H. C. Andersen)
- 50) Potten, der rendte. [eventyr]
- 51) Prinsessen der altid havde ret. (Kim Fupz Aakeson)
- 52) Prinsessen der ikke ville giftes. (Babette Cole. 1986. Høst og Søn)
- 53) Prinsessen, der ville være Hendes Majestæt. (Hiawyn Oram. 1994. Forum)
- 54) Prinsessen som skrev på rosens blad. (Hjalmar Bergman. 1987. Carlsen/if)
- 55) Ridderen der ikke ville slås. (Barbara Shook Hazen)
- 56) Spionen der kom ind fra kulden. (John le Carré)
- 57) Spøgelset som ville være prinsesse. (Siri Melchior. 1997)
- 58) Stangspringeren der kom ind i varmen. (Angelo Hjort. 1984. Vindrose)
- 59) Stedet som ikke er. (Ole Sarvig. 1966)
- 60) Stedet som ikke er - Fremtidens nærvær, netværk og Internet. (Tor Nørretranders. 1997. Aschehoug)
- 61) Tiden der fulgte. (Erich Maria Remarque)
- 62) Tiden der revnede. (Lotte Linck. 1997. Samleren)
- 63) Uret, der talte. (Claus Præstholm. 1990. Gyldendal)
- 64) Ørnen, der var bange for store højder. (Lars Klitting. Gyldendal)

### 3.4. § 3 のまとめ

§ 3.3.1 と § 3.3.2 のリストからわかるように、〔定の先行詞(一形容詞類) + 制限的關係節〕の構造をもつ題名の総数が65点あるうち、64点が〔名詞既知形 + 制限的關係節〕の構造をもつものであり、その範疇は主に子供向けの絵本(主に § 3.1.1 と § 3.2.1 のリストを参照)、物語(主に § 3.1.2 の(2)、§ 3.2.1 のリストを参照)、刑事・探偵もの(§ 3.1.2 の(3)、§ 3.2.7 の(2)、(3)、(7)、(11)、(12)など)、スパイもの(§ 3.2.7 の(14)、(15)など)などのフィクションに多い。そのほか、伝記(§ 3.2.6 の(6))やエッセイ(§ 3.1.2 の(1)、(6)、(7)、§ 3.2.2 の(7)など)にも見られることがわかった。一方、〔指示代名詞 + 名詞 + 制限的關係節〕の構造をしているのはわずか1点だけである。このこ

とから，§1 で言及した Paludan-Müller 氏の指摘は正しいということが言えそうであるが，念のためにより多くの題名を検討する必要があるだろう．それにはインターネット上での書名検索が考えられる．デンマーク語の図書をすべて検討することはもとより不可能であり，当然網羅的ではありえないとはいうものの，インターネットを利用することでなるべくそれに近づくことができるであろう．

#### 4. インターネットによる検索

デンマーク語の書名の検索ができるインターネット上のホームページはいくつかあろうが，今回の調査では，デンマークの出版社協会が出しているホームページ Bogguide の Søg Bøger のページ (Bogguide - Søg Bøger の URL (<http://www.bogguide.dk/bog/soegboeger.idc>))<sup>13)</sup> とデンマークの王立図書館 (Det kongelige Bibliotek) のデータベース R E X 1 による図書検索，オンラインカタログ (Det kongelige Biblioteks online katalog (<http://rexwww.kb.dk>))<sup>14)</sup> の2つのデータベースを使って検索を行なった。<sup>15)</sup>

Bogguide - Søg Bøger のデータベースは，現在デンマークの書店で購入することができる25,000点を越える書籍を登録している。<sup>16)</sup> 一方，王立図書館の R E X 1 は貸し出し対象となっている書籍類約100万点を登録している。<sup>17)</sup>

##### 4.1. 入力語句

書名としての〔定の先行詞(-形容詞類)+制限的關係節〕には〔名詞既知形+制限的關係節〕と〔指示代名詞+名詞+制限的關係節〕とがあるが，実際には以下のような形で現れると考えられる(名詞 pige あるいは bil や hus を例にとって示す．この場合，作家の用いるコンマ法によって，先行詞の直後にコンマがある場合とない場合とがある.)．

##### 先行詞 = 名詞単数形

- |                                 |                                |
|---------------------------------|--------------------------------|
| (a) Den pige(,) der ...         | (aX) Pigen(,) der ...          |
| (b) Den pige(,) som ...         | (bX) Pigen(,) som ...          |
| (c) Den pige(,) ...             | (cX) Pigen(,) ...              |
| (d) Den pige(,) hvis ...        | (dX) Pigen(,) hvis ...         |
| (e) Den pige(,) PRÆP hvem ...   | (eX) Pigen(,) PRÆP hvem ...    |
| (e1) Den pige(,) for hvem ...   | (eX1) Pigen(,) for hvem ...    |
| (e2) Den pige(,) med hvem ...   | (eX2) Pigen(,) med hvem ...    |
| (eN) Den pige(,) ... hvem ...   | (eXN) Pigen(,) ... hvem ...    |
| (f) Den bil(,) hvilken ...      | (fX) Bilen(,) hvilken ...      |
| (g) Det hus(,) hvilket ...      | (gX) Huset(,) hvilket ...      |
| (h) Den bil(,) PRÆP hvilken ... | (hX) Bilen(,) PRÆP hvilken ... |
| (h1) Den bil(,) med hvilken ... | (hX1) Bilen(,) med hvilken ... |
| (h2) Den bil(,) i hvilken ...   | (hX2) Bilen(,) i hvilken ...   |
| (hN) Den bil(,) ... hvilken ... | (hXN) Bilen(,) ... hvilken ... |
| (i) Det hus(,) PRÆP hvilket ... | (iX) Huset(,) PRÆP hvilket ... |
| (i1) Det hus(,) i hvilket ...   | (iX1) Huset(,) i hvilket ...   |

(i2) Det hus(,) til hvilket ...	(iX2) Huset(,) til hvilket ...
(iN) Det hus(,) ... hvilket ...	(iXN) Huset(,) ... hvilket ...
(j) Det hus(,) hvor ...	(jX) Huset(,) hvor ...
(k) Det hus(,) hvor+ PRÆP/ADV ...	(kX) Huset(,) hvor+ PRÆP/ADV ...
(k1) Det hus(,) hvori ...	(kX1) Huset(,) hvori ...
(k2) Det hus(,) hvorpå ...	(kX2) Huset(,) hvorpå ...
(kN) Det hus(,) hvor... ..	(kXN) Huset(,) hvor... ..

先行詞 = 名詞複数形

(l) De piger(,) der ...	(lX) Pigerne(,) der ...
(m) De piger(,) som ...	(mX) Pigerne(,) som ...
(n) De piger(,) ...	(nX) Pigerne(,) ...
(o) De piger(,) hvis ...	(oX) Pigerne(,) hvis ...
(p) De piger(,) PRÆP hvem ...	(pX) Pigerne(,) PRÆP hvem ...
(p1) De piger(,) for hvem ...	(pX1) Pigerne(,) for hvem ...
(p2) De piger(,) med hvem ...	(pX2) Pigerne(,) med hvem ...
(pN) De piger(,) ... hvem ...	(pXN) Pigerne(,) ... hvem ...
(q) De biler(,) hvilke ...	(qX) Bilerne(,) hvilke ...
(r) De biler(,) PRÆP hvilke ...	(rX) Bilerne(,) PRÆP hvilke ...
(r1) De biler(,) med hvilke ...	(rX1) Bilerne(,) med hvilke ...
(r2) De biler(,) i hvilke ...	(rX2) Bilerne(,) i hvilke ...
(rN) De biler(,) ... hvilke ...	(rXN) Bilerne(,) ... hvilke ...
(s) De huse(,) hvor ...	(sX) Husene(,) hvor ...
(t) De huse(,) hvor+ PRÆP/ADV ...	(tX) Husene(,) hvor+ PRÆP/ADV ...
(t1) De huse(,) hvori ...	(tX1) Husene(,) hvori ...
(t2) De huse(,) hvorpå ...	(tX2) Husene(,) hvorpå ...
(tN) De huse(,) hvor... ..	(tXN) Husene(,) hvor... ..

[ N = 不定整数, PRÆP = 前置詞, ADV = 副詞 ]

インターネット上の Bogguide と R E X 1 で、これらのケースのすべてを検索することは可能であろうか。

検索する語句として、上の (a)~(t), (aX)~(tX)に見られる関係代名詞 (der, som, hvis, hvem, hvilken, hvilket, hvilke), 関係副詞 (hvor, hvor+ PRÆP/ADV) を入力することが可能であれば、上の (a)~(t), (aX)~(tX)のうち、関係代名詞が省略されているケース ((c), (cX), (n), (nX)) を除く<sup>18)</sup> すべてのケースを調べることができるであろう。

その場合、(c), (cX), (n), (nX)のケースを調べることは不可能なので、この欠如を少しでも補うために、先行詞として具体的にいくつかの名詞を考えた。書架やカタログで探した結果の題名のリスト (§ 3.3.1 と § 3.3.2) から、[ 定の先行詞 (- 形容詞類) + 制限的關係節 ] の構造をもつ題名は子供向けの物語、絵本、刑事・探偵もの、スパイもの、そして伝記に比較的多いと考えられるので、次のような人間と動物を表す名詞を選択した。

baby, barn, bror (broder), dame, datter, dreng, far (fader), fætter, kone, kusine, kvinde, mand, menneske, mor (moder), pige, prins,

prinsesse, søn, søster; abe, and, bamse, bjørn, drage, elefant, fisk, flodhest, fugl, får, ged, giraf, gris, gås, hane, hare, hest, hund, høne, høns, kanin, kat, ko, krage, løve, muldvarp, mus, næsehorn, okse, pingvin, ravn, rotte, ræv, slange, stork, svin, tiger, ulv, ælling, ørn

以上のような方法で、網羅的と言うにはほど遠いかもしれないが、できるだけ多くの題名を探すことにした。

## 4.2. 検索方法

### 4.2.1. Bogguide - Søg Bøger における検索方法<sup>19)</sup>

先行詞としての名詞に関して検索当初は，“Den pige der”(0) [ “ ” の中は入力語句，( ) の中の数値は当該タイプの題名の点数(検索結果) ]，“Den pige, der”(0)，“Pigen der”(2)，“Pigen, der”(0) 等々と検索語句を入力していたが、検索結果の点数が少なかった。上の題名リスト (§ 3.3.2) で、比較的その数の多い名詞 mand の場合でも，“Den mand der”(0)，“Den mand, der”(0)，“Manden der”(7)，“Manden, der”(0) 等々のように、やはり検索結果の点数が少なかったので、検索効率上げること考えた。例えば、pige に関して、§ 4.1 の(a)～(t)，(aX)～(tX)のすべてのケースを検索するためには，“pige”と入力すると，“pige”という綴りを含む題名が99点表示されるので、その中から § 4.1 の(a)～(t)，(aX)～(tX)のケースを探せばよいわけである。<sup>20)</sup>

関係代名詞と関係副詞に関しては、例えば、der の場合は、“der”とのみ入力すると、3,078点もの題名を含むリストが表示されるので、関係代名詞 der の前後のスペースを考慮した“[der]” [ □ はスペースを示す ] を入力すると、241点の題名を含むリストが得られる。この中から〔定の先行詞(－形容詞類)+制限的關係節〕の構造をもつ題名を探すわけである。同様に、som: “[som]” <247> [ < > ] の中の数値は、例えば247点の題名を含んだリストが表示されることを意味する]、hvis: “[hvis]” <7>、hvem: “[hvem]” <21>、hvilken/hvilket/hvilke: “[hvilke]” <8>、hvor+PRÆP/ADV: “[hvor]” <127>。

### 4.2.2. R E X 1 における検索方法<sup>21)</sup>

先行詞としての名詞に関して、R E X 1 では Bogguide とは異なり、例えば“pige”と入力するだけでは、§ 4.1 の(a)～(t)，(aX)～(tX)のすべてに関わるリストを得ることはできない。なぜなら、“pige”という入力では piger, pigen, pigerne は対象から除外されるからである。また、“den pige”，“den pige der”，

“den pige som”,あるいは“de piger”,“de piger der”,“de piger som”等の語句を入力した場合には,den,de,der,somはカウントされずに無視されてしまうので,結局,単に“pige”あるいは“piger”と入力するのと同じことになる.つまり,例えば,pigeに関して,(a)~(t),(aX)~(tX)のすべてに関わるリストを得るためには,①単数ゼロ形:“pige”,②複数未知形:“piger”,③単数既知形:“pigen”,④複数既知形:“pigerne”の4種類の入力をしなければならない.その結果は,①“pige”〈510〉/0 [510点の題名を含んだリスト<sup>22)</sup>が示され,そのうち0点が〔指示代名詞+名詞+制限的關係節〕であると読む],②“piger”〈456〉/0,③“pigen”〈206〉/10 [206点の題名のうち10点が〔名詞既知形+制限的關係節〕であると読む],④“pigerne”〈49〉/0である.<sup>23)・24)</sup>この方法で,andの①“and”は検索不可能であった.<sup>25)</sup>關係代名詞と關係副詞に関しては,“der”が〈アクセス不可能〉な状態が続いていたが,<sup>26)</sup>“som”〈10718〉,“hvor”〈1196〉<sup>27)</sup>であった.“der”がアクセス不可能であるということもさることながら,“som”〈10718〉というのも作業をするには大きすぎる数値であるので,R E X 1のデータベースをいくつかの領域に区切って検索するシステム(Baseafgrænsning)を使い,量的に手頃でありかつ目的の図書が比較的多そうな領域であるFiolstrædeで検索をすることにした.<sup>28)</sup>その結果は,“der”〈アクセス不可能〉,“som”〈6523〉,“hvor”〈526〉であり,ここから〔定の先行詞(-形容詞類)+制限的關係節〕の構造をもつ題名を探すことにする.その後,8月23日に,Fiolstrædeで“der”〈22827〉という数値を得たが,その大きな数値のために検索は断念せざるをえなかった.“der”が検索できないということは,§4.1の(a)~(t),(aX)~(tX)のうちの重要な部分の検索が欠如することになるが,これは仕方がないこととした.

### 4.3. 検索結果

#### 4.3.1. 〔名詞既知形+制限的關係節〕の構造をもつ書名のリスト

##### 4.3.1.1. Bogguide - Søg Bøger での検索結果

- 1) Ansvaret der blev væk. Skandalerne i erhvervslivet og politik. (Hugo Gaarden. 1997. Børsen)
- 2) Brandbilen som forsvandt. (Maj Sjöwall og Per Wahlöö. 1993. Gyldendal)
- 3) Byen der brændte - historien om en familie på Kreta i krig og fred. (Kyriaki Ramsing. 1997. Holkenfeldt 3)
- 4) Dragen der ville besøge indianerne. (Otfried Preussler. 1996. Sommer & Sørensen)
- 5) Drengen, der ikke ville sove. (Helen Cooper. 1996. Flachs)
- 6) Drengen der kom for sent til verden - stykker i 2 akter. (Kaj Nissen. 1995. Drama)
- 7) Drengen, der kom hen hvor peberet gror. (Johannes Møllehave. 1993. Lindhardt og Ringhof)
- 8) Drengen, der lugtede. (Mogens Lyhne. 1997. Gyldendal)
- 9) Drengen der sparkede. (Lasse Anrell. 1997. Thorup)
- 10) Drengen hvis øjne så alt. (Yashar Kemal. 1995. Klim)
- 11) Drengen som ville være menneske. (Jørn Riel. 1995. Sesam)
- 12) Drømmender revnede - personlige DDR-oplevelser 1973-90/94. (Jens Fransen. 1995. Politiken revy)

- 13) Elefantrumpen, der duftede som en blomst - små fabler fra Vestafrika. (Janne Lundström. 1995. Forum)
- 14) Elefanten der så gerne ville være ternet. (Susanna Hartmann. 1996. Carlsen)
- 15) Floden der forsvandt - originalplanche nr. 775-820. (Harold Foster. 1993. Carlsons Comics)
- 16) Floden der steg til himmels - tolv historier af afrikanske fortællere. (1996. Aks Hjulet i samarbejde med ALOA)
- 17) Hunden der lod sig lokke. (Karen Borch. 1997. Gyldendal)
- 18) Hunden, som smilede. (Ulf Stark. 1996. Gyldendal)
- 19) Katastrofen der udeblev. Rusland i forvandling 1992-1996. (Flemming Rose. 1997. Gyldendal)
- 20) Katten der blev stor på en nat. (Thorstein Thomsen. 1996. Forum)
- 21) Katten, der kradsede sig. (Jonathan Long. 1995. Apostrof)
- 22) Kvinden der bor i jorden. (Swain Wolfe. 1996. Viva)
- 23) Kvinden der gik ind i døre. (Roddy Doyle. 1996. Samleren)
- 24) Kvinden der hjemsøgte disse bjerge. (Sharyn McCrumb. 1998. Klim)
- 25) Kvinden der husker. (Linda Lay Shuler. 1995 (1996). Samleren)
- 26) Kvinden der rider som en mand. (Tamora Pierce. 1992. Tellerup)
- 27) Kvinden som blev til en gris. (Marie Darrieussecq. 1997. Tiderne Skifter)
- 28) Kysset, der fik sneen til at smelte. (Tor Fretheim. 1994. Gyldendal)
- 29) Løftet der gik i opfyldelse. (Jørgen-Ulv Magnus. 1998. Dansk Lutherske Forlag)
- 30) Manden der blev tyndere. (Stephen King. 1994. Artia)
- 31) Manden der elskede ost. (Garrison Keillor. 1997. Forum)
- 32) Manden der forvekslede sin kone med en hat. (Oliver W. Sacks. 1998. Spektrum)
- 33) Manden der lytter til heste. (Monty Roberts. 1997. Aschehoug)
- 34) Manden der målte længdegraden - den sandfærdige historie om et ensomt geni der løste sin tids største videnskabelige problem. (Dava Sobel. 1997. Borgen)
- 35) Manden der plantede træer. (Jean Giono. 1995. Thorup)
- 36) Manden der så togene køre forbi. (Georges Simenon. 1995. Forum)
- 37) Manden som elskede dukker. (Jean-Charles Kraehn. 1997. Arboris)
- 38) Manden som spiste hele verden. (Søren Rasmussen. 1996. Carlsen)
- 39) Maskinen der kunne standse krigen. (René Follet. 1997. Arboris)
- 40) Muldvarpen, der ville vide, hvem der havde lavet lort på dens hoved. (Werner Holzwarth. 1996. Høst)
- 41) Nålen der læger - akupunktur i videnskabelig belysning flere tusind års erfaring - dog en sjat. (Søren Ballesgaard. 1997. KnowWare)
- 42) Ordet der høres. (Lisbeth Smedegaard Andersen. 1996. Anis)
- 43) Pigen der ejede en by. (O. T. Nelson. 1997. CDR Forlag)
- 44) Pigen der var go' til mange ting. (Dorte Karrebæk. 1996. Forum)
- 45) Pigen som ikke brød sig om at slås. (Siv Widerberg. 1998. Gyldendal)
- 46) Pigen som ikke ville kysse. (Rose Lagercrantz. 1997. Gyldendal)
- 47) Pigen som narrede døden. (Rose Lagercrantz. 1995. Høst)
- 48) Pigen som søgte havets mor. (Jørn Riel. 1996. Lindhart og Ringhof)
- 49) Pigen som ville være nr. 1. (Annalena McAfee. 1993. Sommer & Sørensen)
- 50) Pingvinen som mistede sin jakke. (Jørgen Stamp Møller. 1997. Carlsen)
- 51) Politikken der blev væk - Danmark og EU. (Kresten Schultz Jørgensen. 1996. Spektrum)
- 52) Prinsessen der altid havde ret. (Kim Fupz Aakeson. 1996. Gyldendal)
- 53) Ridderen der ikke ville slås. (Barbara Shook Hazen. 1995. Forum)
- 54) Sognet som vokser ind i himmelen. (J. Anker Larsen. 1997. Sankt Ansgars Forlag)
- 55) Spøgelset som ville være prinsesse. (Siri Melchior. 1997. Gyldendal)
- 56) Stedet som ikke er. (Tor Nørretranders. 1997. Aschehoug)
- 57) Tiden der revnede. (Lotte Linck. 1997. Samleren)
- 58) Troldmanden, der elskede Hjertedamen. (Mich Vraa. 1995. Klematis)
- 59) Uret der gik sine egne veje. (Per Nilsson. 1994. Thorup)

#### 4.3.1.2. R E X 1 での検索結果<sup>29)</sup>

- 1) Aaret, der gik -: Vers og Tegninger. (Mogens Dam. 1950. Kbh.)
- 2) Barnet der blev ældre og ældre: Kronikker og erindringer. (Benny Andersen. 1973. Kbh. Borgens Forlag)
- 3) Boghandleren der holdt op med at bade. (Fritiof Nilsson. 1947. Kbh. < Bokhandleren som sluttede bada.)
- 4) Brandbilen som forsvandt. (Maj Sjöwall og Per Wahlöö. 1970. Kbh.)
- 5) Ceremoniellet som bliver at iagttage ved Liget af Hans Excellence Friherre Johan Wilhelm Sprengtporten, forhen General af Infanteriet i kongelig svensk Tieneste, extraordinair Ambassadeur ved det kongelige danske Hof, Ridder og Kommandeur af de kongelige svenske Ordener: Dets Bisættelse i St. Petri Kirke den X. Februarii 1796. (1796. Kbh.)
- 6) Congoleseren der lo: Roman. (Lennart Hagerfors. 1988. Kbh. Gyldendal. < Kongolesen som skrattede.)
- 7) Dagen, som kommer -! (H. Kjær. 1919. Kbh. Eget Forlag)
- 8) Dagen vi aldrig glemmer; Li'esaa tit du vil. (Hans Jørgen Jensen. cop. 1946. Kbh. Jac. Boesen)
- 9) Dalen hvor bladene falder: Roman. (Tim Pears. 1996. Kbh. Samleren. < In the place of fallen leaves.)
- 10) Damen der skød på doktoren: En bog om Anna Hude. (Jens Chr. Manniche. 1993. Kbh. Gad)
- 11) Djævelen som blev narret af en Sømand. (2. opl. 1862. Kbh.)
- 12) Dommeren som forrædte retfærdigheden. (Jön Björnsson. 1977. Kbh. Chr. Erichsen)
- 13) Drengen, der ikke kunne blive bange. (Bjarne B. Reuter. 1978. Kbh. Banner & Korch)
- 14) Drengen der kom hen hvor peberet gror. (Johannes Møllehave. 1993. Kbh. Lindhart og Ringhof)
- 15) Drengen, der mødte en trolld. (Grete Thorulf. 1970. Gråsten)
- 16) Drengen, der sagde "Ja". "Der Jasager". (Kurt Weill. Kbh. Skandinavisk og Borups Musikforlag)
- 17) Drengen der vidste for meget. (Steffen Jakobsen. 1991. Århus. Pimpernel)
- 18) Drengen, der vilde erobre Siam: En sand Fortælling. (Holger Rosenberg. 1913. Kbh.)
- 19) Drengen der ville være bange. (Jon Ranheimsæter. 1990 (1988). Kbh. Gyldendal)
- 20) Drengen hvis broder var en fisk. (J. Maag Busch. 1973 (1972). Herning. Multi-grafia)
- 21) Drengen, som hed Krudt. (Herman Stilling. 1989. Kbh. Mallings)
- 22) Drengen som ville være menneske. (Jørn Riel. 1979. Kbh. Sesam)
- 23) Drømmen som blev Virkelighed. Den kristne Buddhistmission gennem 25 Aar. (1947. Kbh.)
- 24) Dødningen, som dræber de Levende: Ingen Spøgelsehistorie, men en underholdende og sandfærdig Begivenhed. (Udgiven af J. Oppenhægem. 1950. Kbh. F. Listoe)
- 25) Fanden, der tog den preussiske Trompeter: En smuk Historie fra Krigen 1864 om hvorledes en jydsk Fisker dræbte en Trompeter som vilde ... (1950. Kbh. Jul Strandberg)
- 26) Fangen, som sang. (Johan Bojer. 1922. Kria. & Kbh.)
- 27) Fløjten som mangler en Spiller: Roman. (Lis Elkjær. 1945. Kbh.)
- 28) Forsvarsministeren hvis mål var egen overflødiggørelse: I hundredeåret typografen, provins-redaktøren og politikeren L. Rasmussens fødsel. (Carl Th. Jørgensen. 1961. Horsens)
- 29) Fuglen der blev levende brændt: Roman. (Agustin Gomez-Arcos. 1986. Kbh. Gyldendal. < Un oiseau boulé vif. 1984)
- 30) Fuglen der lander. (Poul Bonum. 1994. Kbh. Gyldendal)
- 31) Grisen der ikke vilde hjem gaa. (1947. Kbh.)
- 32) Havet som blev krænket: Roman fra Tyrkiet. (Yashar Kemal. 1989. Kbh. Tiden; Ballerup. i samarbejde med Nyt Dansk Litteraturselskab)
- 33) Hesten der varslede død. (John Franklin Bardin. 1992. Århus. Klim. < The deadly Percheron)
- 34) Indianerne der altid tabte. (Stig Lindholm. 1978. Kbh. Forum. < Indianerna som

- alltid förlorade. 1976)
- 35) Julen jeg husker. (1984)
  - 36) Kampen, som føres imod Grundloven af 5te Juni 1849 af den doctrinære Reaction, med den danske Folkeforening og dens Formand, Hr. Orla Lehmann, i Spidsen. (W. Rosen. 1865. Kbh.)
  - 37) Katten, der fik feber: Dyreroman. (Johannes Wulff. 1965 (1952). Kbh.)
  - 38) Katten der gik sine egne veje. (Rudyard Kipling. 1990. Frederiksberg. Branner og Korch. < engelsk)
  - 39) Kirken som kommer. Profeten Daniels Budskab. (Walter Lythi. 1938. Kbh.)
  - 40) Konen som blev så lille som en teske og andre eventyr. (Alf Prøysen. 1957. Kbh.) [ 訳 ]
  - 41) Kvinden, der besejrede Slaveejerne: En Fortælling om Harriet Beecher Stowe. (H. J. Kaeser. 1948. Kbh.)
  - 42) Kvinden der forsvandt. (Graham Winston. 1957. Kbh. < The Sleeping Partner.)
  - 43) Kvinden der forsvandt: Maigret og det lange siv. (Georges Simenon. 1953. Kbh. < Maigret et la grande perche.)
  - 44) Kvinden der gik ind i døre: Roman. (Roddy Doyle. 1996. Kbh. Samleren)
  - 45) Kvindender husker. (Linda Lay Shuler. 1988. Kbh. Samleren. < She who remembers.)
  - 46) Kvinden der ikke måtte holde katte og andre noveller. (Patrick White. 1974. Kbh. Brøndum)
  - 47) Kvinden, der ikke røbede sig: En fortælling. (Peter Handke. 1977. Kbh. Gyldendal)
  - 48) Kvinden der klædte sig nøgen for sin elskede: Roman. (Jan Wiese. 1991. Kbh. Gyldendal. < Kvinnen der kledte sig naken for sin elskede.)
  - 49) Kvinden der lignede Greta Garbo. (Maj Sjöwall & Tomas Ross. 1991. Kbh. Gyldendal. < Kvinnan som liknede Greta Garbo.)
  - 50) Kvinden du gav mig. (J. G. Allard. 1992. Kbh. Gyldendal. < The kindness of women.)
  - 51) Kvinden som red bort og andre Noveller. (Udvalg og Oversættelse ved Tom Kristen sen. 1938. Kbh. Gyldendal)
  - 52) Landet hvor Arkens Due fløj. (Martin Jensen. 1944. Kbh.)
  - 53) Landet, hvor kilderne sprang: Rejserids og Pilgrimstanker fra det hellige Land. (C. Skovgaard-Petersen. 1925 (1923-1924). Kbh.)
  - 54) Landet, som fortærer sine Mennesker: Roman. (Ernst Harthern. udg. af A.O.F.'s Bogkreds. 1937. Kbh.)
  - 55) Landet som ikke vil dø: Belgien og Belgierne under Krigen. (de Gerlache de Gomery. 1916. Kria.)
  - 56) Maleriet, som endte i Ilden: Særtryk fra Aarhus-Udstillingens Katalog 1953. (Martin A. Hansen. 1954. Aarhus)
  - 57) Manden der af og til var der. (Claus Senderovitz. 1993. Klampenborg. Attika)
  - 58) Manden der aldrig traadte paa noget levende. (Lis Elkjær. 1944. Kbh.)
  - 59) Manden der blev tyndere. (Stephen King. 1992. Kbh. Artia. < Thinner.)
  - 60) Manden der dræbte sig selv. (Julian Symons. 1969. Kbh. < The man who killed himself.)
  - 61) Manden, der dræbte sine 5 Kjærestere, og nu er bleven opdaget i Januar 1884. (1950. Kbh. Jul. Strandberg)
  - 62) Manden der døde. (D. H. Lawrence. 1947. Kbh. < The man who died.)
  - 63) Manden der elskede Retfærdigheden. (Ronald Fangen. 1935. Kbh. < norsk)
  - 64) Manden der elskede vulkaner. (Susan Sontag. 1993. Kbh. Gyldendal. < The Volcano lover.)
  - 65) Manden der forraadte. (Peter Lille. 1949. Kbh.)
  - 66) Manden der forvekslede sin kone med en hat. (Oliver W. Sacks. 1998. Spektrum)
  - 67) Manden der fulgte med. (Erik Pouliet. 1973. Kbh. Fremads kriminalromaner. Fremad)
  - 68) Manden der gik gennem mure. (Marcel Aymé. 1956. Kbh.)
  - 69) Manden der hentede Jordan: Bogen om Niels Frederiksen. (Johannes Christiansen. 1948. Kbh.)
  - 70) Manden der holdt op med at ryge. (Tage Danielsson. 1975. Kbh. Lindhart og Ringhof. < Mannen som sluttede røka. 1968)
  - 71) Manden der holdt op med at smile. (Erik Otto Larsen. 1990. Kbh. Cicero)

- 72) Manden der huskede. (Eiler Jørgensen. 1968. Kbh.)
- 73) MANDEN, DER KALDTE PÅ EN HEST. (Mikkel Stolt. 1993. Kbh.)
- 74) Manden der købte drømmen. (Vitus Schade. 1985)
- 75) Manden, der myrdede: En militærattachés Dagbog fra Konstantinopel. (Claude Farrère. 1914. Kbh.)
- 76) Manden, der overlevede sin skæbne. Harald Nielsen 1879-1957. (Nina Bjørneboe. 1981. Vanløse. Georg Ryders Eftf.)
- 77) Manden der reddede London: Fortællingen om Michel Holland. (George Martelli. 1963. Kbh. < Agent extraordinary.)
- 78) Manden, der solgte Eiffeltårnet. (James F. Johnson. 1963. Odense. Skandinavisk Bogforlag. < The man who sold the Eiffel Tower.)
- 79) Manden, der stjal et Raadhus, eller Kaptajnen fra Køpenisk <d.v.s. Wilhelm Voigt>. (Kjeld Eifelt. 1948. Kbh.)
- 80) Manden der styrtede ned: Roman. (Lars Lundgaard. 2. udg. 1982 (1980). Kbh. Fremad)
- 81) Manden, der søgte Gud. (Sinclair Lewis. 1950. Kbh. < The God-Seeker.)
- 82) Manden der så togene køre forbi. (Georges Simenon. 1995. Forum)
- 83) Manden, der tænkte Ting. (Valdemar Holst. nyudg. 1965 (1938). Kbh.)
- 84) Manden der var mere end nysgerrig. (Erik Nørgaard. 1977. Kbh. Forum)
- 85) Manden der ville være god: Roman. (Ole Henrik Laub. 1972. Kbh. Gyldendal)
- 86) Manden der ville være skyldig. (Henrik Stangerup. 1973. Kbh. Gyldendal)
- 87) Manden der ændrede historien. (1985. Kbh. Scandinavia; Myllheim. Campus Crusade for Christ-Europe)
- 88) Manden som besøgte os. (Marius Grout. 1945. Kbh. < Passage de l'homme.)
- 89) Manden som blev sig selv. (Franz Berliner. 1988. Kbh. Sesam)
- 90) Manden som gik op i røg. (Maj Sjöwall og Per Wahlöö. 1967. Kbh.)
- 91) Manden som Gud glemte. (Th. A. Rasmussen. 1934. Kbh. og Oslo)
- 92) Manden som havde slået ihjel. (Poul-Henrik Trampe. 1974. Kbh. Lademann)
- 93) Manden som hængte sig. (Kristiania. Norsk Musikforlag; Kbh. Wilhelm Hansen)
- 94) Manden som ikke fandtes: Roman. (Pat Barker. 1989. Charlottenlund. Rosinante. < The man who wasn't there. 1988)
- 95) Manden, som ikke veg: En Beretning om David Livingstone, som trodsede den afrikanske Vildmarks Farer. (Niels Hydén. 1948. Kbh.)
- 96) Manden som ingen kendte. (Karen Bjerresø. 1969. Kbh.)
- 97) Manden som kvinderne elskede: Bror Blixens liv. (Ulf Ashan. 1988. Kbh. Sesam. < svensk. Baron Blixen.)
- 98) Manden som lær. (Victor Hugo. 1920. Kbh.) [ 訳 ]
- 99) Manden, som skiftede Ansigt. (Marcel Aymé. 1943. Kbh. < La belle image. 1941)
- 100) Manden som skulde stille hjemme. (P. Chr. Asbjørnsen. 1896. Kbh.)
- 101) Manden som var Lørdag. (Derek Lambert. 1988. Kbh. Cicero. < The man who was Saturday. 1985)
- 102) Manden som var tilfreds med sit liv. (Christer Kihlman. 1976. Kbh. Gyldendal. < Dyre prins. 1975)
- 103) Manden, som var Torsdag. (G. K. Chesterton. 1944. Kbh.) [ 訳 ]
- 104) Manden, som ville ingen ondt. (Martha Christensen. 1995. Kbh. Per Kofod)
- 105) Mottet, som afsiunges paa Christiansborg i Fasten 1781. (Birgitte Catharine Boye. 1781. Kbh.) [ogsaa m. fransk Titel og Text]
- 106) Mørket der gir glæden dybde. (Märta Tikkanen. 1981. Kbh. Lindhart og Ringhof. < Mörkret som ger glädjen djup.)
- 107) Natten der varede otte dage. (Anders Bjørnvad. 1967. Kbh.)
- 108) Nybyggerdrengen som blev Præsident: Af Abraham Lincoln's Liv. (Niels Hydén. 1949. Kbh. < svensk)
- 109) Pigen de andre børn ikke måtte lege med: Roman. (Irmgard Keun. 1982. Kbh. Hekla. < Das Mädchen, mit dem die Kinder nicht verkehren durften. 1980)
- 110) Pigen der løj. (Elinor øberg. 1943. Kbh.)
- 111) Pigen der smilede. (Karin Michaëlis. 1929. Kbh. og Oslo)
- 112) Pigen der søgte: Nordiske Fortællinger. (Aage Madelung. 1941. Kbh.)
- 113) Pigen der trådte på brødet: Danmarks og islandske håndskrifter. (Palle Lauring. 1965. Kbh.)

- 114) Pigen der var klogere end kejseren og andre folkeeventyr om kloge kvinder. (Samlet og fortalt i Kvindeåret 1975 af Anine Rud. 1976. Kbh. Gyldendal)
- 115) Pigen, der var spejl: En erindring. (Harald Hermal. 1957. Skjern)
- 116) Pigen der vaskede sig i morgenduggen og andre historier. (Mina Martinez. 1973. Kbh. Palbe. < The pedlar of Swaffham. 1970)
- 117) Pigen som bor på landet. (M. Oberdörffer. 1973. Kbh. Imudico. < Mädchen mit roten Haaren.)
- 118) Pigen som søgte havets mor: Eventyr fra Grønland. (Jørn Riel. cop. 1981. Kbh. Logos)
- 119) Pigen, som trådte på brødet. Eventyrspil i 3 akter. (Arnold Jensen. 1950. Kbh.)
- 120) Prinsen der ville arbejde: Et musikdramatisk stykke for 4.-5. klasse. (Jesper Andersen. cop. 1991. Kbh. Wilhelm Hansen)
- 121) Prinsessen der blev en mand og andre trylleeventyr. (Genfortalt af Carsten Høgh. 1988. Kbh. Haase)
- 122) Prinsessen, der spandt. (Ingeborg Maria Sick. 1906. Kbh.)
- 123) Prinsessen som ikke kunde lé. (Herman Petersen. 1896. Kbh.)
- 124) Scenen, som er. (R. P. Sørensen. 1979. Padborg. Padborg Bogtrykkeri)
- 125) Selskabet, som understøtter ugifte Fruentimne, hvis Kaar ikke svare til deres Opdragelse 1792-1917. (1917. Kbh.)
- 126) Slaget som Stalin tabte 1948-53. (Vladimir Dedijer. 1970. Kbh. < The Battle Stalinlost/Memoirs 1948-1953)
- 127) Slottet som var lavet af æggeskaller: Slovakiske eventyr. (Genfortalt af Iboja Wandall-Holm. 1968. Kbh.)
- 128) Slægten, som kommer. (Grethe Morthorst. 1940. Kbh.)
- 129) Slægterne som er udgaaet fra Duede i Breum, Grinderslev Sogn, Viborg Amt. (Anders Kjelling. 1943. Vinderup)
- 130) Sagnet som vokser ind i himmelen. (J. Anker Larsen. 2. udg. 1978 (1928). Kbh. Sankt Ansgars Forlag)
- 131) Soldaten som kan hexe: Et Syngespil i een Akt. (L. Anseaume. 1782. Kbh.) [ 訳 ]
- 132) Sommeren der gik: En roman. (Bjørn Nørgaard. 1971. Kbh. Rhodos)
- 133) Spørgsmaalet Du skal - ikke sværge: Hvorfor kan jeg ikke i min Ungdom faae at vide, hvad Sandhed er?: Hvortil skal saa Præsterne tjene, naar de endog fortie Sandheden i saa vigtigt et Stykke som Eedsspørgsmaalet, hvis Besvarelse man altsaa først i en moderne Alder ad anden Vei maa indhente. (Hans Jensen. 1868. Aalborg)
- 134) Stedet, som ikke er. (Ole Sarvig. 1966. Kbh.)
- 135) Synerne, som Gud Herren aabenbarede for M. A. Sommer. Et kortfattet Levnedløb. (1888. Aalborg)
- 136) Talen, som blev holdet i Anledning af Ærkekrandsens Opreisning paa det Kongelige Octrojerede Westindiske Handels Pakhus den 30. Maji 1781. (1781)
- 137) Tiden der fulgte. (Erich Maria Remarque. 1964. Kbh. < Der Weg zurück.)
- 138) Tiden, der fulgte: Spredte Indlæg fra Femaaret efter Danmarks Befrielse. (A. Svensson. 1950. Kbh.)
- 139) Tiden, der fulgte -/Medarbejdere: Landets dygtigste Pressefotografer. (C. Næsh Hendriksen. 1948. Odense)
- 140) Tiden der kommer: Tanker om halvfjerdserne og firserne. (Herman Kahn. 1972. Kbh. Lindhart og Ringhof. < Things to come.)
- 141) Tiden, der svandt: Barndoms- og Ungdomsminder fra Herlufsholm og København. (F. Bauditz. 1911. Kbh.)
- 142) Ulven der hoppede og andre noveller. (Knud Andersen. 1962. Kbh.)
- 143) Vandet, som skiller og forener: Rapport fra en arbejdsgruppe nedsat af Ørebro-missionen, Sverige: Om dåbsforståelse og dåbspraksis i et økumenisk perspektiv. 1990. Brande. Føltved. < svensk)
- 144) Vanskelighederne som hindre Regenten at befordre Undersaaternes Lyksalighed: En Tale paa Hans Kongelige Høihed Kronprindsens Fødselsdag den 28 Januarii 1790. (Mathias West. 1790. Kbh.)
- 145) Vejen som aldrig ender. (Niels P. Jørgensen. 1945. Kbh.)
- 146) Ynglingen, som har forladt Hjemmet. (J. A. James. Udgiven af J. Vahl. Aalborg. 1867)

#### 4.3.2. [指示代名詞 + 名詞 + 制限的關係節] の構造をもつ題名のリスト

##### Bogguide - Søg Bøger

- 1) Det hjerte vi har, som også er kød. (Hans Sande. 1995. Høst)

##### R E X 1<sup>30)</sup>

- 2) "Det Barn, som ligger i Vuggens Siv"/af Søtoft; "Jeg rækker dig min trogne hand"/af C. N.: To Romancer. (C. H. Glass. 1848. Kjøbenhavn. Julius Cohen)
- 3) De Bønner, som ethvert Folk har Aarsag til at gjøre for sin Konge: Prædiken holden i Frue Kirke til Aftensang den 29de Januar 1804 paa Søndag Septuag. (Henrik Georg Clausen. 1950. Kbh.)
- 4) De børn, Gud gav os/ En hilsen fra Københavns Søndagsskoleudvalg til søndagsskolebørnenes hjem og til medarbejderne i anledning af de Københavnske søndagsskoler 75 års jubilæum, 1875-1950. (Svend Borregaard. 1950. Kbh.)
- 5) De Forandringer som Norge haver været underkastet baade i verdslige og geistlige Sager: Extraheret af Torfæi chronico rerum Norvegicarum, tilligemed en Liste over de saa kaldede Næsse-Konger, og derpaa følgende Enevolds Regenter, fra Harald Haarfager til vore Tider. (1771. Kbh.)
- 6) De Fordringer som stilles til et tidssvarende Skydevaaben for Fodfolket: Foredrag holdt den 26 November i det Krigsvidenskabelige Selskab som Indledning til en Diskussion. (1883. Kbh.) (Trykt som manuscript)
- 7) De Grunde, som opfordre os til, med Mod og uovervindelig Standhaftighed at trodse enhver Fare, som Fremtiden maatte føre os i - forestillet i en Prædiken for de i og om Odense Kantonnerende Tropper i St. Hans Kirke i Odense den 27 September 1807. (B. Pontoppidan. Odense. 1807)
- 8) Den Aand, hvori Christi Mission bør føres: Ved Missionsgudstjeneste i Huuseby Kirke 3. Februar 1865: Til Minde om Ansgar. (L. Gude. 1865. Kbh.)
- 9) Den dag, du gav os. (C. C. Schalefield. 1997. Fredericia. Indre Missions Nodebank)
- 10) Den Grund, hvorpaa jeg bygger"; Jesus Christus, Frelser-Manden": to Psalmer: for een Stemme med Pianoforte eller for 4 Stemmer. (Sigrid Henriette Wienecke. Kjøbenhavn)
- 11) Den Hensigt, som den christelige Religions Stifter havde med sine Bestræbelser for Verden. (C. Bastholm. 1793. Kbh.) [Religions Bog for Ungdommen. 1798]
- 12) Den Kjærlighed, der er stærk som Døden: Prædiken i Trinitatis Kirke i Kjøbenhavn, den 13de Marts 1883. (Vilh. Beck. 1883. Kbh.)
- 13) Den Kraft der i Guds Ord, hos hvem den yttres sig, og hvorudi den beviser sig: Betragtet i en Prædiken over det Evangelium paa 5. Søndag efter Trinitatis Luc. 5. V. 1-2: Holdet for det Kongel: Herskab. (Peder Hersleb. 1721. Kbh.)
- 14) Den livsild som forbrænder: 24 prædikener. 2. opl. (Johannes Møllehave. 1979. Kbh. Lindhart og Ringhof)
- 15) Den mand der kalder sig Alvard. (Hans-Jørgen Nielsen. 1982 (1970). Kbh.)
- 16) Den Tid, der svandt og den, der kommer: Afskeds-Prædiken for Skjørpinge og Taardrup Menigheder den 24de Søndag efter Trinitatis 1850. (F. E. Boisen. 1851. Kbh.)
- 17) Det paradys som var engang. (Frans G. Bengtsson. 1954. Kbh. < Den lustgård som jag minns. 1953. Sth.)

#### 4.4. § 4 のまとめ

§ 4.3.1.1 と § 4.3.1.2 のリストを、重複しているものを整理して、インターネット上で得た結果を合計すると、[名詞既知形 + 制限的關係節] の構造をもつ題名は196点となる。一方、[指示代名詞 + 名詞 + 制限的關係節] の方は § 4.3.2 の17点だけである。

## 5. 考察

§3 と §4 のリストを1つにまとめて、今回の調査の結果を合わせると、〔定の先行詞(－形容詞類)+制限的關係節〕の構造をもつ題名は全部で249点見つけることができた。そのうち、232点が〔名詞既知形+制限的關係節〕の構造をもつものであり、残りの17点が〔指示代名詞+名詞+制限的關係節〕である(§4.3.2のリストと同じ)。

§3.4 で見たように、〔名詞既知形+制限的關係節〕の構造をもつ題名は、主に絵本、物語、刑事・探偵もの、スパイものなどのフィクションに見られ、そして伝記やエッセーなどにも見られる。また、§1 で触れたように、この構造をもつ題名は話し言葉的であると仮定すると、これら2つの事項から外れるものの題名が〔指示代名詞+名詞+制限的關係節〕の構造になるのかもしれない。このことを念頭に置き、〔指示代名詞+名詞+制限的關係節〕の構造をもつ題名のリスト(§4.3.2)を検討してみる。

(3), (7), (12), (13), (14), (16)は聖職者による説教(prædiken)の記録であり、(8)も同様であろう。(10)は賛美歌であり、(9)も賛美歌のようである。また、(11)は宗教書である。これら10点はフィクションの範疇に入らないのは言うまでもないが、宗教関係ということで、書き言葉的色彩がきわめて強いと言えるかもしれない。

次に(4)と(6)は講演の記録であり、1950年と1883年のものである。比較的堅苦しい表現に満ちた書き言葉的色彩が強いものであろうし、もちろんフィクションでもない。

(5)はノルウェー年代記からの抄録であり、しかも1771年のものである。もちろんフィクションではないし、書き言葉そのものである。

(2)は叙情詩、ロマンス(romance)である。詩の中に堅い書き言葉の表現が多数見られそうである。

(17)は、Lönnroth & Delblanc (1989: 84)によれば、回想録である。スウェーデン語の原題が、なぜ Lustgården ではなく Den lustgård なのかということは本稿で扱う問題ではないが、そのスウェーデン語の原題の Den lustgård, すなわち〔決定詞(determinativ)+名詞ゼロ形〕という形が、デンマーク語の題名に影響を与えたと考えられるかもしれない。

(1)は、コペンハーゲン・コムーネ立図書館のデータベース<sup>31)</sup>によれば、対象年齢が15歳以上のサイエンスフィクションであり、(17)の場合に似て、ノルウェー語の Det hjertet som vi har, som og er kjøtt の翻訳である。ノルウェー語の Det hjertet, すなわち〔指示代名詞+名詞既知形〕という構造をそのままデンマーク語に置き換えたものと思われる。その場合デンマーク語には“二重限定”

が存在しないので、〔指示代名詞＋名詞ゼロ形〕となったのであろう。

したがって、この(17)と(1)を考察の対象外とすると、(15)以外はすべてフィクションではないので、その題名が〔名詞既知形＋制限的關係節〕でなくとも、予想を裏切るものではない。小説の題名、すなわちフィクションの題名として(15)だけが〔指示代名詞＋名詞＋制限的關係節〕であったと考えれば、この(15)は本誌12号の拙稿(新谷 1996: 122)で言及した Paludan-Müller 氏の分析に合致しないことになる。氏は、〔名詞既知形＋制限的關係節〕は小説の題名、すなわちフィクションの題名として比較的多く見られると言ひ、その場合、〔名詞既知形＋制限的關係節〕は“神話的 (mytisk)”なものを表すと言う。同氏が“神話的な”と言うのは、神話の世界は想像の産物であり、架空の世界であるが、人びとにとって既知の世界、すなわち既知項目であると同様に、小説の作者は小説の中で—そして冒頭、あるいは題名からすでに—架空の世界を造り上げており、その世界は作者だけでなく、読者にとっても既知の世界、すなわち既知項目であるふりをするのであり、それゆえに〔名詞既知形＋制限的關係節〕が題名によく用いられるのであろう、というのが同氏の分析であった。

Paludan-Müller 氏は(15)、すなわち、Hans-Jørgen Nielsen の Den mand der kalder sig Alvard (1970) を実験的 (‘eksperimentalt’) な作品であり、小説の題名がふつう“神話的 (mytisk)”であるのに対し、この作品の題名は“現実に存在する人物(男)に言及している (konkret henvisende)” ような印象を与えと言う。なお、氏が受けるこの印象は〔指示代名詞＋名詞＋制限的關係節〕の構造が表す意味が与えるものなのかどうかは、現段階では不明である。

本稿では、近くにあつて閲覧可能な書架や身近にあつた書籍カタログなどを用い、かつ、インターネット上で Bogguide と REX 1 のデータベースを使い、〔定の先行詞(－形容詞類)＋制限的關係節〕の構造をもつ題名をできるだけ多く集めた。インターネットでは検索方法に最初から限界があつた上、REX 1 では100万点近くを記録しており、データが膨大なために途中で検索を諦めねばならないケースがあつた。それゆえ、デンマーク語の題名で〔定の先行詞(－形容詞類)＋制限的關係節〕の構造をもつものをすべて網羅するにはほど遠い結果しか得られなかったものと思われる。しかし、それでも249点の題名が集まり、その中でフィクションとしては § 4.3.2 の(15)の1点のみが〔指示代名詞＋名詞＋制限的關係節〕の構造であつた。したがって、この1点はフィクションの題名としては極めて異例で、例外であるとする事ができるであろう。

Paludan-Müller 氏が言うように、フィクションの題名に現れる〔名詞既知形＋制限的關係節〕が、mytisk ということだけで説明できるのかどうかはわからない。〔指示代名詞＋名詞＋制限的關係節〕と〔名詞既知形＋制限的關係節〕と

の間になんらかの意味の違いがあり、そこに説明が求められるべきなのかもしれない。しかし現段階ではその説明は見出せておらず、今後の研究課題となろう。

最後に、本稿の調査の結果、〔名詞既知形＋制限的關係節〕の構造の題名はフィクションではない伝記やエッセーなどでも見られることが確認できたことを付け加えておく。

## Excursus

### E.1. 従位節によって修飾・限定される定の名詞

〔定の先行詞（－形容詞類）＋制限的關係節〕の構造をもつ題名を探すことが本稿の目的であるが、その作業の途中で、カタログ NYE BØGER 1997 (cf. § 3.2.2) に次の題名があった。

Det år hestene kom: Roman. (Mary Mackey. 1997. Samleren)

また、A Bibliography of Danish Literature in English Translation 1950-1980 (cf. § 3.2.6) にも次の題名があった。

Den Dag, jeg første Gang dig saa. (Holger Drachmann. Poem from the collection Sangenes Bog. 1889. > The Day When First I Saw Your Face.)

この2つにおいて、Det år と Den Dag の後に省略されているのは da であると考えるのが一番無理がないであろう。この da は基本的には接続詞であるが、これを関係副詞と見て、det år(, da) ... や den dag(, da) ... といった構造を〔定の先行詞（－形容詞類）＋制限的關係節〕とみなす人もいる。Diderichsen (1976: 210-212) がそうで、次のような例を挙げている。

Husker du den Sommer, (da) vi var i Norge?

Han døde netop i det Øjeblik, (da) han stod paa sin Lykkes Tinde.

da はあくまでも接続詞であり関係副詞ではないとした場合でも、Mikkelsen (1911: 718, 737 Anm.) には、次のような文では、省略されているのは da ばかりではなく、som である可能性もあると記述されている。<sup>32)</sup>

Den dag, han kom hjem, fejlede han ingenting.

Den dag, da han kom hjem, fejlede han ingenting.

Den dag, som han kom hjem, fejlede han ingenting.

このように som が省略されている可能性があるとする、〔det år+限定的に修飾する従位節〕といった構造は、da が省略されていることの方が多という気はするものの、〔定の先行詞(-形容詞類)+制限的關係節〕の1つとして考えておく必要がある。また、da を關係副詞とみなす場合には、なおさらのことであり、この〔時を表す名詞(+定,-形容詞類)+制限的關係節(あるいは従位節)〕が小説等の題名として現れる場合、〔名詞既知形+制限的關係節(あるいは従位節)〕となるのか、それとも〔指示代名詞+名詞+制限的關係節(あるいは従位節)〕となるのかを調べることも本稿の調査に含まれるべきなのかもしれない。

書架やカタログでの調査(cf. §3)では、上記2つの〔指示代名詞+名詞+制限的關係節(あるいは従位節)〕の構造をもつ題名が見つかっただけである。さらに、§4と同様にインターネット上で Bogguide と R E X 1 を使って探してみた。

## E.2. 入力語句と検索方法

書名としての〔時を表す名詞(+定,-形容詞類)+制限的關係節(あるいは制限的従位節)〕は次のような形で現れると考えられる(år を例にとって示す)。

(E:a) Det år(,) ...	(E:aX) Året(,) ...
(E:b) Det år(,) da ...	(E:bX) Året(,) da ...
(E:c) Det år(,) som ...	(E:cX) Året(,) som ...

これらのケースをできるだけ多く検索するために、da と som を検索する語句として選ぶ。<sup>33)</sup>

次に、時を表す名詞として以下のものを選択した。

aften, dag, eftermiddag, efterår, formiddag, forår, jul, middag, morgen, måned, nat, sommer, tid, time, uge, vinter, år.

具体的な検索は、Bogguide に関しては §4.2.1 に示した方法で、R E X 1 は §4.2.2 の方法で行なった。<sup>34)</sup>

## E.3. 検索結果

### E.3.1. 〔名詞既知形+制限的關係節(あるいは従位節)〕の構造をもつ題名のリスト

- 1) Sommeren russerne kom. (Peter Schmidt. 1992. Munkebo. Mariteam)

### E.3.2. [指示代名詞 + 名詞 + 制限的關係節(あるいは従位節)] の構造をもつ 題名のリスト

#### E.3.2.1. da (あるいは som) の省略

- 1) Den Dag, jeg første Gang dig saa. (Holger Drachmann. Poem from the collection Sangenes Bog. 1889. > The Day When First I Saw Your Face.)
- 2) Den dag døden døde. (Michael Green. 1993. Credo)
- 3) Den dag fjenden så rødt. (Sarah Garland. 1996. Forum)
- 4) Den dag glæden brød ud! (Nils Aage Jensen. 1995. Gyldendal)
- 5) Den dag Ingolf blev væk. (Heidi Bruhn. 1996. Carlsen)
- 6) Den dag jeg dør: Fox-Trot. (Jørgen B. Schmidt. cop. 1943. Kbh. Tempo)
- 7) Den dag Leopold blev forelsket. (Dina Gellert. 1998. Forum)
- 8) Den dag Leopold blev ond. (Dina Gellert. 1988. Forum)
- 9) Den dag politiet kom: Spanske børn fortæller. (Maith Håkansson. 1979. Kbh. Høst & Søn)
- 10) Den dag solen gik i sort. (Jean Van Hamme. 1996. Carlsen Comics)
- 11) Den dag vi vågner. (Maria Giacobbe. 1983. Kbh. Gyldendal. < italiensk)
- 12) Den sommer Torben sad fast i luftkanalen. (Thorstein Thomsen. 1989. Klampenborg. Attika)
- 13) Den vinter jeg blev voksen. (Richard Bradford. 1969. Kbh. < Red sky at morning.)
- 14) Den vinter Torben blev glemt i en snemand. (Thorstein Thomsen. 1987. Klampenborg. Attika)
- 15) Det år hestene kom: Roman. (Mary Mackey. 1997. Samleren)
- 16) Det år Kristian fik en lillesøster. (Eva Kaaberbøl. 1994. Klematis)
- 17) Det år Ricardo Reis døde. (José Saramago. 1989. Kbh. Samleren. < 0 ano da morte de Ricardo Reis. 1984)

#### E.3.2.2. da が省略されていない例

- 1) Den dag, da Dorthe drak dus: Foxtrot. (Kai Møller. cop. 1943. Kbh. Wilhelm Hansen)
- 2) Den dag, da krigen kom. (Jørn Birkeholm. 1988. Kbh. Hernov)
- 3) Den sommer da Apollo 11 landede på månen. (Ulrik T. Skafte. cop. 1987. Randers. Thode)
- 4) Den sommer da Morten og Bitten skjulte bjørne i Kalkbaks gruber. (Jens Sigsgaard. 1985. Kbh. Gyldendal)

#### E.4. まとめ

以上の調査の結果, [時を表す名詞(+定, -形容詞類)+制限的關係節(あるいは従位節)] の構造をもつ題名22点のうち, [名詞既知形+制限的關係節(あるいは従位節)] の例が1点であるのに対し, [指示代名詞+名詞+制限的關係節(あるいは従位節)] の例は21点(うち, da(あるいは som) が省略されているものが17点, da が省略されていないものが4点)であった. 本稿で調査した[定の先行詞(-形容詞類)+制限的關係節]の結果とはまったく反対の結果が出た. 単なるスタイル(文体)の問題なのか, それとも先行詞の形によって意味に違いがあるために生じている結果なのかであろうか, 今後の研究課題である.

(1998.9.5)

## 注

- (1) Kristiansen *et al.* (1996 : 112) は、高校生やその他の若い人たちの書き言葉で〔名詞既知形 + 制限的關係節〕が使われる傾向が、ある程度みられると言う。

Der er i gymnasieelevers og andre unges skriftlige dansk en vis tendens til at bruge bestemt form også når der er tale om en restriktiv relativsætning:

‘I det første fortumlede års tid var der endnu mulighed for at mødes med *dissidenterne* han sad i fængsel med...’ (sammenlign: ‘... de dissidenter han sad i fængsel med’)

‘*Teksten* som jeg vil behandle...’ (Sammenlign: ‘Den tekst som jeg vil behandle...’).

Kristiansen *et al.* のこの記述の意図するところは明白ではないが、この記述は、〔名詞既知形 + 制限的關係節〕の使用は最近の若い人たちに特有の傾向であると読むことができる。しかし、それが事実ではないことは、日頃デンマーク語に接している者には直感されることである。

- (2) 今年度から本学の2年生の講読の授業でテキストとして用いている Kirsten Gjesing の *Klaus og Kristian* と *Lone og Gerda* はデンマークの一般生活と文化事情を豊富に盛り込んだ良質の教科書であるが、その中に出てくる〔定の先行詞(-形容詞類) + 制限的關係節〕はほとんどが〔名詞既知形 + 制限的關係節〕である(例. *Huset, som Klaus og Lone har købt, er stort og gammelt.* (Gjesing 1993 : 21)). この点を含めた様々な指摘を筆者の Gjesing 氏に送ったところ丁寧な返事(1998年3月4日付けの手紙)をいただいた。氏は Jylland の Viborg で20年近く移民にデンマーク語を教えてきたそうであるが、その経験から、話し、読むことを必要としている移民の初級者は日常の話し言葉を学ばなくてはならないという見解である(このことは、氏の上記2つのテキストでは、従位節の中の語順が主節の語順になっているものがところどころ見られることから窺える)。つまり、〔名詞既知形 + 制限的關係節〕も話し言葉と見ていることになる。氏の著した初級文法書 *Grammatik - ABC* にも〔名詞既知形 + 制限的關係節〕の例文しか載せていない(p.48)。

Hun kendte manden, som ringede på døren.

Han er glad for bilen, som han købte.

- (3) Cf. Skautrup (1968 : 207-208).
- (4) Hvis ordet, hvortil relativet knytter sig, ikke staar umiddelbart foran dette, er nu demonstrativet paakrævet: *den del af byen, der var lagt i aske, jeg mødte den original igen igaar, som jeg har fortalt dig om.*
- (5) § 3.1.1 のリスト参照。

- (6) リスト中の書名は、本稿では作業の繁雑さを避けるために、イタリックで示すことはしない。
- (7) 本稿において、<の記号は翻訳の題名とその原題を示す。例えば、A<Bとあれば、Aが翻訳で、Bが原題である。
- (8) §3.1.1 のリスト参照。
- (9) §3.2.6 のリスト参照。
- (10) 1998年2月下旬。
- (11) 本稿でリストに挙げた書名の著者、発行年、発行地、発行者、翻訳か否か、翻訳の元の言語の題名等は、情報源によっては不明なものがある。
- (12) 本稿において、>の記号は原題とその翻訳の題名を示す。例えば、A>Bとあれば、Aが原題で、Bが翻訳である。
- (13) Yahoo! Danmark (<http://www.yahoo.dk/>) で検索項目に bogguide を入力して探して行くこともできるし、あるいは検索項目に gad (デンマークの一出版社名 Gad) を入力しても、たどっていくことができる。
- (14) デンマークの王立図書館 (Det kongelige Bibliotek) のデータベースの1つ、REX1による図書検索。[オンラインカタログ (Det kongelige Biblioteks online katalog (<http://rexwww.kb.dk/>)) のページで Søg i REX1 をクリックして、Velkommen til REX1 のページ (<http://rexwww.kb.dk/rex/rexscript/cmd=con,i=1,l=0,r=0>) に移り、そこで Søgning をクリックして、SØGNING のページ (<http://rexwww.kb.dk/rexscript/i=3,k=bvLcq,l=0,c=sg,r=0>) を開く。
- (15) Bogguide - Søg Bøger および REX1 のデータベースは日々更新されているが、今回検索を行なったのは、1998年7月上旬～8月下旬の2ヵ月弱の期間にわたっており、同日同時間におけるデータの収集は不可能であった。したがって、本稿で示した種々の入力語句に対する結果の数値は、同日同時間におけるデータに基づくものではないし、また、その後、数値に変化が見られるものがありうる。
- (16) REX1 information のページ (<http://rexwww.kb.dk/danish/rex1info.html>)、ならびに REXWWW Hjælp のページ (Liste over søgebaser i REX WWW) (<http://www.kb.dk/kb/rexwww/baselist.htm>)。
- (17) Bogguide - Søg Bøger のページ (<http://www.bogguide.dk/bog/soegboeger.idc>)。
- (18) 関係代名詞 som が省略されている場合、空白(ゼロ)を検索語句として入力することはできない。
- (19) Bogguide - Søg Bøger のページの書籍検索カードの書名欄 (Titel) に当該語句を入力する。
- (20) pige 同様、比較的多くの検索結果が予想される dreng の場合も、“dreng” と入力すると102点の題名を含むリストが表示される。しかし、mand の場合は、“mand” と入力すると、(-)mand(-) という綴りを含む Amanda hjælper til などといった題名も含んだ272点ものリストが表示されるため、“den

mand”, “manden”, “mænd” と入力する方が賢明である。

(21) R E X 1 の SØGNINGのページ (<http://rexwww.kb.dk/rexsript/i=3,k=bvLcq,l=0,c=sg,r=0>) を開き, 検索書式 (søgeformular) の søgeregister を Titel に合わせ, その後, 検索すべき書名 — ここでは, mand, manden あるいは der, som, hvilken, hvor など — を入力して, 検索を開始する。検索の結果, 入力した語を含む書名があることがわかれば, Vis i kort format をクリックし, 書名のみリストを表示し, 目的の対象を探す。そして見つければ, その書名をクリックし, 著者, 発行書, 発行年等をチェックする。

(22) 書名の項目で検索しているのであるが, 書名そのものには当該語がなくても, 著者の名前が検索語と同じ綴りであるとか, 書籍の内容説明のテキスト中に当該語がある場合なども検索の対象になってしまう。また, 外国語から翻訳されたデンマーク語の題名の中に当該語がある場合には, 元の外国語の題名が検索結果として表示されてしまう。そのため, 外国語で対応する語 (例. pige に対する girl, Mädchen など) も検索の対象となっているかのような錯覚を覚えることもある。また, 外国語で検索語と同綴りの語 (例. aber (abe <サル> の複数未知形) とドイツ語の接続詞 aber; and (and <カモ, アヒル> の単数ゼロ形) と英語の接続詞 and) も検索の対象になってしまう。

(23) § 4.1 に挙げた各名詞の検索結果は次のようである。

baby: ①<171>/0, ②<1>/0, ③<0>/0, ④<0>/0; barn: ①<1158>/1, ②<2977>/2, ③<246>/0, ④<121>/0; bror: ①<87>/0, ②<157>/0, ③<0>/0, ④<101>/0; (broder: ①<105>/0, ③<6>/0); dame: ①<442>/0, ②<136>/0, ③<68>/1, ④<24>/0; datter: ①<421>/0, ②<112>/0, ③<4>/0, ④<0>/0; dreng: ①<211>/0, ②<205>/0, ③<73>/10, ④<19>/0; far: ①<803>/0, ②<69>/0, ③<10>/0, ④<37>/0; (fader: ①<272>/0, ③<34>/0); fætter: ①<29>/0, ②<3>/0, ③<4>/0, ④<3>/0; kone: ①<159>/0, ②<66>/0, ③<28>/1, ④<5>/0; kusine: ①<15>/0, ②<1>/0, ③<0>/0, ④<1>/0; kvinde: ①<526>/0, ②<1725>/0, ③<314>/11, ④<152>/0; mand: ①<875>/1, ②<884>/0, ③<295>/48, ④<39>/0; menneske: ①<457>/0, ②<781>/0, ③<432>/0, ④<50>/0; mor: ①<532>/0, ②<109>/0, ③<10>/0, ④<18>/0; (moder: ①<307>/0, ③<59>/0); pige: ①<510>/0, ②<456>/0, ③<206>/10, ④<47>/0; prins: ①<207>/0, ②<16>/0, ③<38>/1, ④<2>/0; prinsesse: ①<120>/0, ②<10>/0, ③<95>/3, ④<2>/0; søn: ①<624>/0, ②<177>/0, ③<15>/0, ④<2>/0; søster: ①<102>/0, ②<83>/0, ③<1>/0, ④<45>/0; abe: ①<29>/0, ②<262>/0, ③<17>/0, ④<2>/0; and: ①<検索不可能>, ②<4>/0, ③<1266>/0, ④<2>/0; bamse: ①<32>/0, ②<3>/0, ③<1>/0, ④<0>/0; bjørn: ①<192>/0, ②<4>/0, ③<4>/0, ④<0>/0; drage: ①<37>/0, ②<36>/0, ③<12>/0, ④<1>/0; elefant: ①<35>/0, ②<9>/0, ③<24>/0, ④<2>/0; fisk: ①=②<47>/0, ③<11>/0, ④<0>/0;

flodhest: ①<2>/0, ②<0>/0, ③<0>/0, ④<0>/0; fugl: ①<138>/0, ②<129>/0, ③<66>/2, ④<51>/0; får: ① = ②<215>/0, ③<3>/0, ④<7>/0; ged: ①<1>/0, ②<0>/0, ③<1>/0, ④<0>/0; giraf: ①<2>/0, ②<0>/0, ③<2>/0, ④<1>/0; gris: ①<40>/0, ②<7>/0, ③<4>/1, ④<1>/0; gås: ①<4>/0, ②<0>/0, ③<1>/0, ④<0>/0; hane: ①<22>/0, ②<2>/0, ③<16>/0, ④<0>/0; hare: ①<74>/0, ②<3>/0, ③<12>/0, ④<0>/0; hest: ①<100>/0, ②<26>/0, ③<29>/1, ④<4>/0; hund: ①<79>/0, ②<30>/0, ③<28>/0, ④<13>/0; høne: ①<16>/0, ②<3>/0, ③<9>/0, ④<0>/0; høns: ③<22>/0, ④<4>/0; kanin: ①<6>/0, ②<4>/0, ③<5>/0, ④<1>/0; kat: ①<114>/0, ②<28>/0, ③<50>/2, ④<3>/0; ko: ①<158>/0, ②<19>/0, ③<6>/0, ④<2>/0; krage: ①<12>/0, ②<1>/0, ③<3>/0, ④<4>/0; løve: ①<28>/0, ②<20>/0, ③<29>/0, ④<2>/0; muldvarp: ①<0>/0, ②<0>/0, ③<2>/0, ④<0>/0; mus: ① = ②<104>/0, ③<43>/0, ④<4>/0; næsehorn: ① = ②<5>/0, ③<2>/0, ④<0>/0; okse: ①<4>/0, ②<1>/0, ③<1>/0, ④<2>/0; pingvin: ①<2>/0, ②<0>/0, ③<1>/0, ④<1>/0; ravn: ①<61>/0, ②<4>/0, ③<47>/0, ④<1>/0; rotte: ①<6>/0, ②<9>/0, ③<7>/0, ④<5>/0; ræv: ①<13>/0, ②<3>/0, ③<28>/0, ④<0>/0; slange: ①<10>/0, ②<4>/0, ③<29>/0, ④<0>/0; stork: ①<18>/0, ②<1>/0, ③<28>/0, ④<3>/0; svin: ① = ②<22>/0, ③<1>/0, ④<5>/0; tiger: ①<83>/0, ②<24>/0, ③<3>/0, ④<1>/0; ulv: ①<25>/0, ②<11>/0, ③<17>/1, ④<5>/0; ælling: ①<26>/0, ②<0>/0, ③<4>/0, ④<1>/0; ørn: ①<23>/0, ②<3>/0, ③<19>/0, ④<1>/0.

- (24) それぞれの当該語を入力した検索結果 (results) が0点でない場合には, 注(19)で記したように, Vis i kort format の標示をクリックして, 書名リストを開くことになる. 書名リストは一度に45点しか表示されない. 次のページ(次の45点)を見るためには, Flere records (kort) の標示をクリックして先に進むわけである. ただし, 何が原因かわからないが, 検索結果が1,000を大きく越える場合には, 書名リストを見ている途中で, Flere records (kort) の標示が出てこなくなり, 先に進めなくなることもある. 例えば, barn ② (= "børn")<2977> では, 2880点目を見終わったところで, Flere records (kort) の標示が出なくなってしまった. そこで, 検索語を含んだ書名リストで, それまで見てきたページのURL (<http://rexwww.kb.dk/rex/rexscript/i=16,k=xScSN,l=0,c=vis,s=1,r=2836,f=1>) の r=2836 の r が result(s) あるいは record(s) のことであろうと見当をつけ, 見たい次のページの最初の番号が2881であるから, r=2881 を入力すると望みのページが表示された. この種のトラブルは, 本稿末の Excursus で扱った入力語句のうち, "år" <5952> では7回も起こった.
- (25) "and" は何度入力を試みても, 'Beklager - brugerområdet er fyldt op.' という説明が出るだけで, 書名リストが表示されるに至らなかった. 英語の接続詞 and も, この検索対象になっているためで, 膨大な点数の書名

は機械が処理するには多すぎるためであろうかなどと考えていたところ、1998年8月19日にやっと、“and”〈181626〉（8月21日には〈181638〉）という回答を得た。181,626点もの題名を見ていくには最低15時間がかかるであろうから、物理的にも、また体力的にも不可能である。その上、王立図書館のオンラインカタログは平日の午前3時から午前7時（デンマーク時間）までの間は閉鎖されてしまうのである。そこで、REX1のデータベースをいくつかの領域に区切って検索するシステム（Baseafgrænsning）を使い、量的に手頃でありかつ目的の図書が比較的多そうな領域である Fiolstræde（詳しくは注(28)参照）で“and”を検索してみた。そうすると、‘Beklager - brugerområdet er fyldt op.’という説明が出てくる。REX1全体で“and”〈181626〉と出たのに、これよりも総数が少ないはずの Fiolstræde で‘Beklager - brugerområdet er fyldt op.’のメッセージが出るのは不可解である。単に数が多いだけというのではないらしい。王立図書館のオンラインカタログの担当者の Barbara Melchior 氏 (bm@kb.dk) に問い合わせた結果、ある特定の時間に“and”を含んだ書籍の検索をしている人が多すぎるためにアクセス可能なメモリ部分が一杯になっているということらしい。“and”という形で入力して検索するかぎり、ほとんどいつもこの状態に遭遇することになる。しかし、8月23日に Fiolstræde でも“and”〈15379〉という結果が得られたが、時間の点からこれを調べていくことは断念せざるをえなかった。

- (26) 注(25)の“and”の場合と同様な原因からであろう。
- (27) hvor+PRÆP/ADV に関しては、REX1での検索では hvoraf, hvorfor, hvormed ... といった語をすべて入力する必要があるため、今回の調査ではこの作業は省略した。
- (28) REX1における検索を迅速にかつより正確に行なうために、REX1を小さな領域、すなわち13の検索ベースに区切って検索を行なうことができる。この検索ベースには、例えば、Slotsholmen [王立図書館が昔から位置している場所に由来する名称であろう]、Amager [コペンハーゲン大学 Amager 校舎（人文学部）にある旧中央図書館（現在王立図書館に併合されている）に由来する名称であろう]、Fiolstræde [Fiolstræde にあるコペンハーゲン大学本部棟内の旧大学中央図書館（現在王立図書館に併合されている）に由来する名称であろう] のようにかつての図書館単位で分かれているベースがあったり、貸し出し対象となっている内外の出版物のベース、音楽関係のベースなどもある。また、REX1の登録書籍のすべてを対象にするベースもあるが、その場合には Slotsholmen の記録から検索を始めたり、Amager の記録から検索を始めるなど、検索を迅速に行なえるようなシステムになっている。本稿では、Fiolstræde を用いた。それは、Fiolstræde は社会科学関係、法律関係が中心であるという注意書きがあるものの、実際に本稿で検索済みの書名を入力すると、この Fiolstræde にその記録が比較的多かったからである。詳しくは次のホームページを参照：Velkommen til REX1 の

ページ (<http://rexwww.kb.dk/rex/rexscript/cmd=con,i=1,l=0,r=0>), および Baser i REX1 のページ (<http://rexwww.kb.dk/rex/rexscript/i=0,k=TDmCU,l=0,c=bl>), および REXWWW Hjælp (Base-afgrænsning) のページ (<http://www.kb.dk/kb/rexwww/baser.htm>).

- (29) このリストには本稿末の Excursus に示した方法で (例えば “år” や “dag” などの語を入力して) 検索した時に偶然得られた結果も含めている。また、すでに注(10)で記したことがこのリストにもあてはまる。つまり、REX1 で得られる情報には発行地、発行者 (出版社)、発行年、翻訳か否か、翻訳の元の言語の題名等が欠けている場合が多々ある。

なお、REX1 などで翻訳の元の原題が示されている場合には、本稿のリストでは、<の記号の右側にその原題を記した。また、翻訳の元の言語名のみ示されている場合には、<の記号の右側にその言語名を記した。そして、元の言語名も、原題も示されておらず、翻訳であることのみが示されている場合には、[訳] の略号を付した。

また、REX1 で用いられている略号で本稿のリストに見られるものに Kbh. Kria. Sth. cop. があるが、これらはそれぞれ København, Kristiania (ノルウェーの), Stockholm, copyright のことである。Barbara Melchior 氏 (bm@kb.dk) によると、cop. が付されるのは、当該書籍に発行年が明記されておらず、© のマークのみが記されている場合である。

- (30) = 注(29).
- (31) Københavns Kommunes Biblioteker. Søgning i Bibliotekernes databaser (<http://www.kkb.bib.dk/s3pl.htm>).
- (32) 省略されているのは、Den dag, hvor han kom hjem, ... の関係副詞 hvor であるとしてもできようが、hvor に関しては § 4.2 の検索ですでに結果がゼロであった。
- (33) som に関しては § 4.2.1 と § 4.2.2 で検索済みである。
- (34) REX1 で、例えば名詞 dag を入力する場合には、① “dag” <1943>/4 [1943点の題名を含んだリストが示され、そのうち4点が〔指示代名詞 + 名詞 + 制限的關係節 (あるいは従位節)〕であると読む], ② “dagen” <587>/0 [587点の題名を含んだリストが示され、そのうち0点が〔名詞既知形 + 制限的關係節 (あるいは従位節)〕であると読む] というように入力する。§ E.2 で選択したすべての名詞について見ると下のようになる。
- aften: ①<431>/0, ②<49>/0; dag: ①<1943>/4, ②<587>/0; eftermiddag: ①<19>/0, ②<4>/0; efterår: ①<74>/0, ②<80>/0; formiddag: ①<11>/0, ②<66>/0; forår: ①<259>/0, ②<126>/0; jul: ①<596>/0, ②<194>/0; middag: ①<27>/0, ②<1>/0; morgen: ①<734>/0, ②<37>/0; måned: ①<67>/0, ②<12>/0; nat: ①<594>/0, ②<351>/0; sommer: ①<641>/2, ②<196>/0; tid: ①<2716>/0, ②<1031>/0; time: ①<2696>/0, ②<7>/0; uge: ①<60>/0, ②<67>/0; vinter: ①<183>/2, ②<81>/0; år: ①<5952>/2, ②<1179>/0.

*Den mand der kalder sig Alvard vs. Manden der ville være skyldig*

- Om danske titler på romaner og bestemmelsestyperne i bestemmende relativsætningers korrelater -

Toshihiro Shintani

### Resumé

Hvad angår korrelaters former foran bestemmende relativsætninger, har jeg i min artikel i *IDUN* 12 rådet japanske danskstuderende eller begyndere til at bruge {demonstrativpronomen + substantiv} og rådet fra at bruge {substantiv i bekendthedsform}. Men efter godt ti måneders ophold i Danmark i fjor ved jeg nu ikke rigtig om jeg kan stå fast ved dette råd: Der lader nemlig til at være mange der ikke ser nogen betydningsforskel mellem {substantiv i bekendthedsform + bestemmende relativsætning} (forkortes {Subst-EN + Bst-relat}) og {demonstrativpronomen + substantiv + bestemmende relativsætning} (forkortes {Dem-pron + Subst + Bst-relat}), men mener at {Subst-EN + Bst-relat} bare tilhører talesproget. Om det passer, vides ikke rigtig. Forholdet mellem disse to konstruktioner står uklart for mig og skal derfor afklares - engang i fremtiden - så at jeg selv kan give et råd til studerende hvad denne sag angår.

I denne forbindelse kan jeg nævne at jeg i min artikel i *IDUN* 12 har gjort opmærksom på at {Subst-EN + Bst-relat} ifølge min kollega Martin Paludan-Müllers umiddelbare fornemmelse ses relativt hyppigt i romaners og novellers, dvs. fiktioners titler som fx *Manden der ville være skyldig*. Skønt denne Paludan-Müllers konstatering virker meget overbevisende, beror den alene på hans dybtgående kundskaber i (dansk) litteratur og hans erfaringer som bogopsætter på et kommunebibliotek i hans unge dage, men stammer ikke fra nogen som helst skrevne kilder.

I denne artikel har jeg samlet så mange danske bogtitler - ikke blot på fiktioner, men også af diverse genrer (også oversættelser) - som muligt i billedbogsafdelingen på Helsingør Kommunes Hovedbibliotek, på hylderne på vores afdeling for dansk og svensk, i diverse for mig tilgængelige bogkataloger og lign., og så på internettet: Bogguiden og REX1 på det kongelige Bibliotek. I alt 232 titler af typen {Subst-EN + Bst-relat} (se § 3.2.2,

§ 4.3.1.1, § 4.3.1.2) og 17 titler af typen [Dem-pron + Subst + Bst-relat] (se § 4.3.2) har jeg kunnet samle.

Titlerne af typen [Subst-EN + Bst-relat] rummer fiktioner (herunder billedbøger, romaner (især kriminalromaner), noveller, fortællinger), biografier og essays etc.

Ud af de 17 titler af typen [Subst-EN + Bst-relat] er 7 prædikener ((3), (7), (8), (12), (13), (14), (16)), 2 salmer ((9), (10)), 1 en religiøs bog ((11)), 2 nedskrivninger af foredrag ((4), (6)), 1 et uddrag af Norges krønike ((5)), og 1 en bog med romancer ((2)). Alle disse 14 er hverken fiktioner, biografier eller essays og kan nok siges at tilhøre skriftsproget.

De to oversættelser hhv. fra norsk og svensk kan siges at afspejle originalsprogenes indflydelse ((1), (17)):

(1) Det hjerte vi har, som også er kød.

<Det hjertet som vi har, som og er kjøtt.

(17) Det paradís som var engang.

<Den lustgård som jag minns.

I disse tilfælde har det ingen betydning at (1) er science-fiction, og at (17) er erindringer.

(15) er dog en roman og udgør derfor et modeksempel til den ovennævnte konstatering af Paludan-Müller. Paludan-Müller siger denne bog af Hans-Jørgen Nielsen er et eksperimentalt værk, og at titlen virker konkret henvisende i modsætning til at romaners og novellers ellers er mytiske.

Ellers kan man nok med stor sandsynlighed konkludere at titler på fiktioner, biografier og nogle essays er af typen [Subst-EN + Bst-relat]. Hvorfor det forholder sig sådan, vil jeg gøre det til en opgave at finde ud af.

I Excursus har jeg samlet titler af typen *Det år hestene kom*, dvs. [demonstrativpronomen + tidsangivende substantiv + bestemmende relativsætning (eller ledsætning)] og [tidsangivende substantiv i bekendthedsform + bestemmende relativsætning (eller ledsætning)]. I alt 21 titler af den første type med/uden konjunktion (eller relativadverbium) *da* har jeg kunnet samle, mens den sidste type kun repræsenteres af et eneste eksempel, som nok kan siges at være en undtagelse.

## 参 考 文 献

(外国語文献の発行地は特記がないかぎり København)

- Diderichsen, Paul. 1976 (1946). *Elementær dansk Grammatik*. 3. udgave. Gyldendal.
- Galberg Jacobsen, Henrik. 1994. "Sprogændringer og sprogvurdering. Om nogle aktuelle engelskinspirerede ændringer i dansk og om vurdering af dem", *Danske Studier* 1994, 5-28. C. A. Reitzels Forlag.
- Gjesing, Kirsten. 1991. *Grammatik - ABC. Dansk grammatik for fremmedsprogede*. Liberalt Oplysnings Forbund.
- . 1993. *Klaus og Kristian. Danske tekster for fremmedsprogede*. 5. oplag. Liberalt Oplysnings Forbund.
- . 1994. *Lone og Gerda. Danske tekster for fremmedsprogede*. 2. oplag. Liberalt Oplysnings Forbund.
- Hansen, Aage. 1927. *Bestemt og ubestemt substantiv. Bidrag til dansk substantivsyntaks*. I. Arnold Busck.
- Kristiansen, Tore, Frans Gregersen, Erik Møller & Inge Lise Pedersen. 1996. *Dansk sproglære*. Dansk lærerforeningen.
- Lönroth, Lars & Sven Delblanc (red.). 1989. *Den Svenska Litteraturen. V. Modernister och arbetardiktare 1920-1950*. Stockholm: Bonniers.
- Mikkelsen, Kr. 1975 (1911). *Dansk ordføjningslære*. Hans Reitzels Forlag.
- Pedersen, Viggo Hjørnager. 1988. *Essays on Translation*. Erhvervsøkonomisk Forlag S/I. Nyt Nordisk Forlag Arnold Busck.
- 新谷俊裕. 1996. 「デンマーク語における名詞の既知形を先行詞とする制限的關係節について」, *IDUN* 12号. 105-148. (= Shintani, Toshihiro. 1996. "Om bestemmende relativsætninger med et substantiv i bekendthedsform som korrelat i dansk", *IDUN*. vol. 12, 105-148.)
- Skautrup, Peter. 1968 (1944). *Det danske Sprogs Historie*. I. 2. oplag. Gyldendal.
- Thorborg, Lisbet. 1996 (1992). *Dansk grammatik i praksis 1. Øvelser i verber og sætningsbygning*. 4. oplag. Akademisk Forlag.

## 資料

- Brostrøm, Torben & Jens Kistrup. 1977. *Dansk litteraturhistorie*. bd. 6. Politikens Forlag.
- Dansk litteraturhistorie*. bd. 9. *Noter og registre*. 1985. Gyldendal.
- NYE BØGER 1997*. 1997. Udgivet af Den Danske Boghandlerforening og Den danske Forlæggerforening.
- Regnbuen - billed- og oplæsningsbøger for de 4 til 9-årige*. 1997. 5. udgave. udarbejdet af børnebibliotekarerne Anne Marie Ottosen og Britta Overgaard. Dansk BiblioteksCenter as.
- Schroeder, Carol L. 1982. *A Bibliography of Danish Literature in English Translation 1950 - 1980. With a Selection of Books about Denmark*. Det danske Selskab.
- Smagsprøver*. 1988. Udgivet af Den danske Boghandlerforening.

## インターネット上のホームページ

- Baser i REX1 (<http://rexwww.kb.dk/rex/rexscript/i=0,k=TDmCU,l=0,c=bl>)
- Bogguide. Søg Bøger (<http://www.bogguide.dk/bog/soegboeger.idc>)
- Det kongelige Biblioteks online katalog (<http://rexwww.kb.dk/>)
- Københavns Kommunes Biblioteker. Søgning i Bibliotekernes databaser (<http://www.kkb.bib.dk/s3p1.htm>)
- REX1 information (<http://rexwww.kb.dk/danish/rex1info.html>)
- REX1 SØGNING (<http://rexwww.kb.dk/rexscript/i=3,k=bvLcq,l=0,c=sg,r=0>)
- REXWWW Hjælp (Baseafgrænsning) (<http://www.kb.dk/kb/rexwww/baser.htm>)
- REXWWW Hjælp (Liste over søgebaser i REXWWW) (<http://www.kb.dk/kb/rexwww/baselist/htm>)
- Velkommen til REX1 (<http://rexwww.kb.dk/rex/rexscript/cmd=con,i=1,l=0,r=0>)
- Yahoo! Danmark (<http://www.yahoo.dk/>)